

痛いのをいっぱい感じたいので体力に極振りしたいと思います。

マガガマオウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

被虐性癖マゾヒズムとも呼ばれる性癖の一種。

もしそんな性癖者がVRMMORPGをプレイしたらどんな化学反応が起こるのか、これはそんなifの世界の物語。

目 次

ド?少女のニューゲーム	1
狂い乱れる少女	8
命と知恵の果実と少女	17
神樹の試練とド?少女前編	25
神樹の試練とド?少女後編	35
ド?少女の毒竜	48
ド?少女とバトルロワイヤル	59
ド?少女の辿った道の上の奇跡	71
ド?少女は自分が楽しむために	86
少女と少女あるいは魔王と英雄	95

ド？少女のニュー・ゲーム

「ううん……痛覚を長く堪能するには、体力が多い方が良いのか。」
体感型オンラインゲーム『New World Online』の初期設定空間の中で、天晴風花は自分のゲーム内での初期装備をどうにするか悩んでいた、というのも彼女は極度の被虐性癖者つまりド？なのである。

「折角現実では味わえない痛覚を体感しに行くんだから、できるだけ長く感じていたよね。」

そんな事を喋りながら自分の趣向に会つた武器がないか選択画面を操作する彼女の手が、とある武器の項目で止まつた。

「ガントレット？……へえ、初期体力値はどのタイプの武器よりも多めなんだ、その代わりそれ以外のステータスは平均値つと……良いじゃない、これにしよう！」

初期武装をガントレットに決め選択画面の決定ボタンを押したが、実はこの装備他のプレイヤーからはあまり評価がよろしくない。

ダントツで不人気な大盾よりかは評価されているが体力以外突出したものが無く初期だと大盾よりかは戦えるが中途半端、寧ろ防御力も並なのでダメージも普通に通り攻撃力もそこそこは有るが力不足感は否めず良くも悪くも器用貧乏な装備と呼ばれていた。

「ふむ、次はステータスピントか……攻撃力は、折角の痛みを感じる時間を縮めたくないからそんなにいらないかな、あと防御力論外として、速力や回避値も逃げちゃ意味ないし要らないとなるとやつぱり体力一択かな。」

ゲーム内の有利不利などお構いなしの彼女は、己の望むまま思つがままポイントを振り分ける。

「ん、よし！ それじゃ、まだ体験した事の無い未知なる苦痛と快樂を求めて、レッツゴー！」

欲望に素直な風花は、この時知る由もなかつた自分とは真逆の理由で同じ様に特定のステータスを一点強化した存在が居たことを。

「おおー、こーがスタート地点かー！」

風花はここではフローラと名乗る事になるが、彼女はゲームの初期ステージつまり始まりの街に降り立つた。

『ここから私の魅惑的な被虐ライフが始まるのね！』

噴水のある広場で初期装備姿のフローラは、未だ体験した事の無い刺激を求め逸る鼓動を押さえられない。

「ああ我慢できない！早く戦闘エリアに向かつちやおう！」

辛抱たまらず戦闘エリアに歩き出すフローラの目はギラつき頬は発情したかの様に赤く染まっていた、だがその歩みは他のプレイヤーと比べも遅い。

『ああもう！じれつたいなあつ！でもこのジラされてる感もコレはコレで……イイ！』

最早何でもある、しかしそんな彼女よりも歩みが遅い同じ初心者プレイヤーが後方に居た事を、未知なる快楽とそれを味わえるフィールドに中々辿り着けないじらしさに内心で見悶えているフローラは気が付く事は無かつた。

このゲームの初期フィールドの戦闘エリアはオーソドックスな街の外の森に設定されている、故に一点強化なんて馬鹿な真似さえしなければ割と直ぐにマップに出られるのである、そう極振りなんて事故が生きる事確実なプレイさえしなければである、ではそんな誰から見ても馬鹿げてる仕出かしをやつたプレイヤーはどうなるか。

「ふうやつと着いたら、うくんジラされ過ぎてうずうずしちゃうよ」と。

到着までに通常の倍の時間が掛かるのである、無論フローラに取つて移動中もご褒美をジラされてる様な感覚はじっくり堪能していたが、やはり出来る事なら肌で刺激を感じたい。

「さあ何処からでも来なさい！未知なる刺激達！」

気合十分な彼女の前に初心者用にデザインされたモンスターがりスローンした、見た目は角の生えた兎だろうか。

「おお最初の相手は貴方ね!!さあ来なさい！」

この世界での最初のバトル一般的なプレイヤーなら初歩の敵は雑魚でしかなく然して苦戦もしない相手だ、だがフローラはド？なので

ある自身に突進してくる白兎の攻撃をその体で受け止める。

「グフツ！痛い……ああ、久方ぶりだよ……ふふふ……アハハハハハハ！」

白兎はゲームで設定されたモンスターの中では最弱の雑魚敵だが、その攻撃は確実にプレイヤーにダメージつまり痛みを与える。

「もつと……もつとだよ、兎君……もつと来てよ！アハハハハ！」

勿論数値化したら大したダメージじゃない、それでもフローラにとつては痛覚を刺激する衝撃信号が体を突き抜ける感覚が堪らなく懐かしかった、何故なら現実世界ではもう彼女は肉体的な痛みを体験する事は色々と難しかったのである。

「痛い！痛いよそして気持ちいい……ああ最高だよ兎君！」

まるで我が世の春を謳歌しているかの様に上機嫌で、モンスターの攻撃をその身に受け続けるフローラ。

「あれ、兎君どうしたの？さつきから勢い弱いよ？」

そんな事をHPの許す限り続けよとした矢先、相手の白兎の攻撃の勢いがみるみる落ちていった。

「何でだろう？……あつ！そつか気が付かなくてゴメンね、一方的バトルじや萎えちゃうよね？うん、今から私も反撃するからその分いっぱい攻撃してね！」

相手の攻撃の手が緩んだのは決して彼女言うように一方的な戦闘に萎えた訳ではない、単に突進攻撃を続けた結果反動ダメージと言うか何度も地面に落ちては傷つき体力を減らしていたのである。

「どりや！つてアレ？もしかして倒しちゃった？」

そしてHPの残量が心許なくなつていた白兎に反撃すれば当然の様に、ガラスの割れる音と共に光となつて消える。

【レベルが2に上がりました。】

【スキル「闘魂」を取得しました。】

白兎の消滅と同時に彼女の頭にアナウンスが流れ、バトルに勝利した事を告げた。

「もう！折角、体が温まつて来た所だつたのに！で「闘魂」？何だろこれ？」

初戦闘の煮え切らなさに立腹するフローラは気分を変える為に、取得したスキルを確認する事にした。

スキル「闘魂」

このスキルの所有者はHPが全快状態から半分以下になると全ステータスが50%上昇する。HPを回復すると効果は終了する。

取得条件

一定時間の間敵から攻撃を受けながら、自身は魔法・武器で一回以上攻撃しない。また攻撃を受けてる最中、ポーション・魔法でHPを回復しない。

「ふむふむ……つまり、ダメージを受け続けていればその間は強くなってる事だね！よーし、どんどん行こう！」

さつきまでむくれ面は何処へやら彼女は上機嫌になつてフイールドの奥に歩を進めた、そして直ぐに次なるご褒美もとい敵が現れる、それは現実では有り得ない大きさのムカデ名はそのまま大ムカデだ。「次は君かゝさつきの兎君よりも、長く楽しめそう！さあ来い！おほおゝ緊縛プレイ？いいねいいね！」

次の相手が現れて早速身構えるフローラの足に絡みつく大ムカデ、普通なら不快に思える行動もド？の彼女はテンションを上げる一助にしかならない。

「うつーいつたい！それになんだろこのジリジリ炙られてるよな痛み？」

大ムカデと言うモンスターの攻撃方は、相手に取り付き牙での噛みつきと毒を流し込むことでの追加ダメージだ、フローラの感じた痛みはその毒によるものだつた。

「おつーこのジクジクしてるのは毒なのかゝ締め上げられて噛みつかれてオマケに毒攻めなんて……何て素晴らしいのかしら！ああ、ここは私の理想郷なの!!」

完全にスイッチの入ったテンションで体に奔る痛みによる快樂を、ここぞとばかり堪能して一人の世界に浸る。

だがここは完全な個人空間ではない事を忘れている、そう他のプレイヤーとも普通に遭遇する事もあるのである。

「君！大丈夫か？今助けるからな！」

「あ……。」

偶然通りかかった大盾使いのプレイヤーが彼女の現状を一目見て、ピンチだと思ったのか助けに入る、最もフローラ本人からすれば余計なお世話以上に折角のお楽しみ中に水を差されたと言う他なのだが。「もう大丈夫だ、大事は無いか君？」

「……大丈夫です、ありがとうございます。」

そんな事とはつゆ知らず彼女に絡みつく大ムカデを倒してしまった大盾使いがフローラに声を掛ける、嗜好の邪魔された事に内心腹を立てはしかが、一応善意あつての行動と考え直しお礼だけは言つておく。

「君は初心者か？だつたら誰かとパーティを組んだ方がいい、何なら俺が……。」

「いえそんな、ご迷惑でしようからお気持ちだけ受け取つておきます。」

一般的のプレイヤーからすれば彼は親切な部類に入る人物だつたが、一般的なプレイをしないフローラには不親切な人種に他ならない、そんな人物と行動を共にしていては自分の欲求がいつまでも満たされないと考え早々に分かれる事を選択した。

「そつそつか……じゃあ、回復ポーションだけでも持つていくといい。」

「ありがとうございます。」

やはり彼は良心的な人物なのだろう親切心からの誘いを袖にされても怒る事はなく、更に回復ポーションを分けてくれた。

フローラにしてもその場の勢いだけでファイールドに出たため回復手段がない状況、最初こそお楽しみを邪魔されて腹は立つたがこうして見ると悪い人ではないのだろうと思い直した、しかし人が多い場所では先程の様に邪魔が入る可能性が高いと踏んでさらに奥へ行くことにした。

「結構奥まで来たな、さて次は誰に会えるかな？」

この系統のマップは奥に行けば行くほどエンカウンタする敵の強

さが上がる、つまり初心者向けの浅部と中級者向けの中間部そして上級者向けの深部では出現するモンスターの種類・攻撃力共に初心者向けのである、そしてフローラが居るのは中間部、基本的に初心者向けに設定されたモンスターとそれなりに実力が付いてきた中級者向けの中堅モンスターがスポーンするフィールドである。

「あつー！君はさつきの、よししさつきは邪魔が入ったから仕切り直しと行こうか！」

そう言つて彼女の前に再び現れた大ムカデともう一度対峙する、今度も足に絡みつき噛みつきと毒で攻撃して彼女を喜ばせる。

【スキル「毒耐性小】を取得しました。】

今度は邪魔が入らない分フローラも安心して攻撃を受け止め続けるが、唐突にアナウンスが聞こえ嗜好の時が再び阻まれた。「もうくなにさ折角良いところだつたのに、毒の効き目も心なしか弱くなつてるし。」

さつきから色々と邪魔ばかり入る事に不満を隠さないで態度で示す、更に付け加えるなら大ムカデの攻撃で発生している毒のダメージも段々と効かなくなつていた。

それは彼女が大ムカデの攻撃を長時間の間、複数回の毒攻撃を受け続けて得た「毒耐性小」と言うスキルの影響だつた。

「はあ、もうＨＰも半分切つてから「闘魂」も発動してるし、そろそろ次の相手を探そーカナ。」

足に絡みつく大ムカデの攻撃では大した痛みも感じる事が出来なくなついたフローラは、自身に懸命に攻撃する大ムカデを片腕で掴みそのまま締め上げる、相手は暫く抵抗していたが光となつて消え失せた。

「さてさて、次の相手は誰だろな。」

再び刺激を求め歩き出すフローラの前に明らかに毒を待つてると認識できる斑模様の大きな蜘蛛が目に前に現れる。

「次は蜘蛛君だね、君はどんな攻撃をしてくるのかな。」

次なる相手の出現に心を躍らせながら相手の攻撃を待つ、すると糸を吐きフローラを絡め捕ると大ムカデ同様の噛みつき攻撃を繰り出

すが今度は効果が違つた。

「むむーこの痺れる感じは麻痺?」、この全身に行き渡るビリビリ感

……はあはあ痺になりそう。」

この蜘蛛はパラライズスペイダーと言い名前の通り麻痺効果のある毒を流しこむ、さつきとは違う感触の刺激に早くも喜悦の表情を浮かべるフローラだがこれも受け続ければ……。

【スキル「麻痺耐性小】を取得しました。】

「えつもう!!ああ……痺れが弱まつてるくもつと感じてたかったのにう。」

当然、耐性が出来てしまふのである。

ゲームのシステムがそうなつてるのでから最早これは諦める他ないのだ、そもそも彼女の様に態々状態異常に掛かる攻撃をくらいに行くプレイヤーが居る事を予測するのは無理な事だつた。

「仕方ない……君の麻痺は新鮮で楽しかつたけど、私はもつと刺激の強い子を探すよ。」

そう言うと絡みつく蜘蛛の糸を引き千切りパラライズスペイダーを掴むと先程と同じように握力で握り潰した。

その後、混乱効果のある蛾のモンスターと遭遇したが、此方もひたすら攻撃を受け続けて耐性スキルを取得してしまいそれ以上は特に目新しい刺激と出会う事は無く街へ戻つてログアウトした。

狂い乱れる少女

「よし！今日は昨日より刺激的な体験が出来るかな？」

初日から一日空け今日もこの電腦世界に降り立つたド？ことフローラ、昨日の魅惑の時間を思い返しながら、今日も未体験の被虐を求めて己の道を突き進む。

「昨日は良い所までいつたんだし、もう少し奥に行けばもっと凄い体験が出来るかも？」

昨日の探索は中間部で毒・麻痺・混乱の状態異常を体験した結果、それぞれの耐性小のスキルを会得してしまったフローラ、なので今度はほかの状態異常か耐性スキルが効かないより強力な状態異常効果のある相手を求めてより深部へ進むことを決めた。

「うんうん。昨日よりも大分奥まで来たね、さてさて本日最初の相手は誰かな？」

初期マップの深部、上級者マップに足を運んだフローラは最初の相手の出現に心を躍らせその時を待つ。

このマップの中で出会う敵は中級者の中でも上位から上級者の下位のプレイヤーが主対象に設定され、初心者では中々手が出し辛いそこそこ強力なモンスターが出現する。

「おお！君は初めて会う子だね？よろしく蜂くん！」

フローラの前に現れたのは大型の蜂ファオレストクインビー、初期マップの中では強力な毒と針による刺突攻撃が特徴のこのファイールドで最も強力なモンスターの一體である。

「ヤル気バツチリだね蜂くん！さあさあおいでよ！君の全てを私に見せて！」

彼女の周りを高い羽音を五月蠅く騒ぎ立て攻撃の体制に入るファオレストクインビー、闘争本能を剥き出しの臨戦態勢の敵の様子にフローラは心を躍らせる。

まさか相手が己の攻撃を受ける事を心待ちにしているとは思つてないファオレストクインビーは、己の武器である針を突き出しフローラの首に突き刺した。

フォアレストクインビーの攻撃は彼女の想像を超えた痛みであり、日に感じたどの痛覚よりも痛烈だった。そんな刺激を肌で感じたフーラは歓喜に震え興奮した表情で敵を見つめる。

彼女の熱い眼差しの意味を威嚇と捉えたフォレストクインビーは負けじと睨み返す、無言の睨み合い（一方的）は而して更なる刺激を求めるフローラの手によつて破られる。

「あはは……そつか、君も一方的なバトルじや盛り上がりがれないんだね……だつたら、私からも反撃してあげるね？」

空中を浮遊するフオレストクインビー相手ではカントレットではリーチが足りない、だが彼女にはそんな事は関係ないただ己の欲望の手が伸びるまま突撃していく。

前日の彼女とは思えない鋭い突きを繰り出すフローラ、彼女のステータスが攻撃力と速力に振られていたらこの一撃だけでも十分な威力となつただろう。

して反撃を受ける。

「くう～きつく～！ はあはあはあ……。」

返ってきた反撃を体で受けると満足そうな笑みを浮かべるフロー
ラ、彼女はそもそも攻撃を当てる必要はないのだ、さつきの攻撃は飽
く迄も反撃を誘発する為のエサでしかない。

「はあはあはあ…………ん？ああ！もうＨＰが半分切つてゐる！」

これまでにない強敵からの攻撃が齧す至極の痛みを堪能していたフローラだが、途中から痛みが鈍つたと感じた彼女がＨＰの残量を確認してみると半分程になっている、彼女の持つスキル「闘魂」が快楽を阻害して半減してしまう。

フォレストクインビーの方も針の攻撃では仕留めきれないと踏ん

たのかもう一いつの毒攻撃にシノブする
「むむーこの感じは毒!!しかもムカデ君のよりも強力なヤツ!!」

一度大ムカデの毒を受けているフローラだからこそ分かる、フォレストクインビーの放つ毒は大ムカデのモノより数段上の効力を持つ猛毒だつた、それこそ彼女が持つ耐性スキルの効果の範囲を超えたメージを与える程である。

「あおおおお。このジワジワと蝕まれてる感覺……やっぱり毒は刺激的でサイコー！」

フローラは自身の被虐性癖を刺激する猛毒の感触に喜びの声を上げる、そしてそんなフローラに更なる刺激が迫っていた。

「わつ何!! つて、昨日の蜘蛛くんよりさらに大きな蜘蛛くん!!」

悦びの絶頂を極めんとするフローラの背後から忍び寄っていた巨大な影、昨日のパラライズスパイダーよりさらに大型で獰猛な蜘蛛型のモンスタースタンタランチュラである。

これも例に洩れず上級者プレイヤー向けモンスターの一角であり、パラライズスパイダーより強力な麻痺効果の攻撃と噛み付きが特徴であつた、さらに麻痺の発現の仕方にも癖があり……。

「はつ！ 麻痺効果のある……糸？」

フローラに向けて放たれた糸が彼女に巻き付くと全身に電流が奔った様に痺れ動き辛くなる。

スタンタランチュラの麻痺攻撃は吐き出す糸にも効果が付与されている、僅かでも絡まれば全身に鋭い電流の様な刺激が伝い動きを封じられるのだ。

「はは、は……毒と麻痺を同時に……何このご褒美？ ハアハアハア……しゆごい。」

彼女に押し寄せる悦楽の嵐に酔いしだただこの状況に浸る、だがここで獲物を横取りされそうになつたフォレストクインビーがスタンタランチュラに攻撃を仕掛ける。

スタンタランチュラの方も負けじと応戦しフローラを横に置いて、二体が獲物を掛けて争いだした。

「あれ？ これって放置プレイ？ だとしても、そんな楽しそうな事すぐ傍でやられたら参加したくなるなあつ！」

麻痺で痺れ毒に蝕まれる体を起き上がりせ激しい戦いを繰り広げ

る二体に混ざろうと足を踏み出したフローラは、突然視界が揺れて思考が纏まらない感覚を覚えた。

「毒と麻痺に続いて今度は混乱かあくはあはあ……今日は大盤振る舞いじゃないか。」

そう言う彼女の背後には混乱状態を引き起こしたモンスターが舞つていた、サイケデリックパピヨンと呼ばれる蝶のモンスター。

前日に戦ったパニックモンスの上位種に値する、強い混乱状態を引き起こす鱗粉で平常心を奪い口吻を伸ばして対象からHPを吸い取る攻撃を仕掛けてくる上級者向けのモンスター。

先程から強力なモンスターが立て続けに三体も出現するこの状況、実は初心者が最初にゲーム内で一番死ぬ事が多い場面なのだ。

特にソロで活動するプレイヤーに多く見られるパターンで中層でそこそこ立ち回れるようになってきた最も調子に乗りやすい時期に発生するシチュエーションで、実力の程を理解して何とか町まで戻ろうとして逆にもつと奥に行ってしまいそこで出現した敵に止めを刺されると言うのがお約束の流れになっていた。

「君も……中々面白い攻撃をするね蝶君……はあはあはあ。」

揺れる視界の中で如何にか耐性スキルの効果で意識を保たせたフローラ、ふらつく足腰に力を籠めサイケデリックパピヨンの正面に体を向け気丈に振舞うフローラ。

如何に今罹っている状態異常が全て耐性のあるものでも三つ一遍に喰らえば大分堪える、フローラはド?だ度し難い被虐性癖者だ、だからとこそ紙一重の所で精神を保つてるとも言えるが逆に捉えれば彼女でもギリギリの状況だつた。

小競り合いをしていた後ろの二体が新たな競争相手の出現に気が付き、この獲物は自分の物だと言うようにサイケデリックパピヨンに襲い掛かる。

「ちよ……と、君達さあ……はあはあじやれつくなら私も混ぜてよつ!……。」

獲物を掛けた三体のモンスターが三つ巴の抗争をようする中、決着を焦らされたフローラが弱った体を引き摺り三体の輪の中に入ろう

とした時、彼女の言葉が途切れ纏う雰囲気に異変が起きた。

「ふふ……あは、あはははははは！」

【スキル 「闘魂」が「激昂」に進化しました。】

フローラが突如不気味な高笑いを始めた時、聞き取れていないのであらう彼女の脳内にアナウンスが流れる。

それに反応して無意識の内にスキル画面を開いていたフローラ、そこにはこう記されていた。

【激昂】

このスキルの保有者はHPが全快状態から半分以下になると全ステータスが70%上昇する。

このスキルの発動中は常時強混乱の状態異常になる。

HPを回復すると効果は終了する。

取得条件

「闘魂」発動中に一時間の間に一定値以上のダメージを受ける事。

強混乱はダンジョンや特定のクエストで出現するボスマモンスターが使用する状態異常の一つ、耐性スキルでは底いきれず無効スキル出なければ防げないある種その状態異常ににおける最高峰と呼べる、そのスキルが常時発動していると言うのは非常に重いデメリットであると言つた方がいい。

「ふひ！ふひひひ！ふははははは！」

けたたましい笑い声に似た奇声を上げ妖しい光を宿した瞳、誰がどう見ても尋常ならざる彼女を離れた場所を偶然通りかかったプレイヤー前日の大盾使いの男性が目撃していた。

フローラの外面はとても整つた容姿をしている、そんな彼女が狂い乱れた様を見せているのはその妖艶さも相まって強く恐怖を駆り立てる、事実大盾の男性は彼女とは距離がかなり離れているにも関わらず迫力に圧倒され一步も動けなかつた。

そしてさつきまで誰がフローラを仕留めるかで争っていた三体も、彼女の異常事態に戦いの手を止めただ傍観する。

「ぐうううう！がああああ！」

フローラの口から発せられる音は最早言葉では無く獣の叫びだつた、その雄叫びで我に返つた三体は慌ててこちらに突進するフローラに応戦するが、「激昂」がもたらした驚異的に上昇したステータスが彼らの攻撃を悉く相殺させた。

「あ、あ、あ、あ、あ、！」

三体が攻撃を繰り出す度にガントレットを的確に捌き攻撃をいなし、これはガントレットと言う武器が持つ唯一他の武器にはない特色ジャストガードと呼ばれるオートスキルだつた。

動かすタイミングさえ合えばどんな攻撃でもダメージを1にすることが出来るのだが、このタイミングを合わせる事がとても難しい、実際最初の三手までならセンスが良ければ難なく捌けるだが四手以降は僅かにタイミングがずれただけで失敗する玄人向け技能であつた。それを難なく二十回以上捌き続いているのは、彼女のセンスが飛び抜けているからだけでなく彼女自身が格闘技の鬼才だつたからである。

「ふつ！」

三体の内最初に相手をしていたフォレストクインビーの間近まで接近したフローラは今度こそ渾身の突きを繰り出す、その一撃は例え「激昂」でステータスを強化していたとしても考えられない威力を持つていて他の二体を巻き添えにして同時に消滅させた。

ジャストカウンターそれがフローラが繰り出した突きを強化した正体である、実はジャストガードが発動している時いなした攻撃で発生していたダメージは無くなつた訳ではなくガントレットに蓄積され攻撃力に加算されていた、更にジャストカウンターはジャストガードのコンボが繋がれば繋がるほどその威力は増大していく。

今回は三体分の攻撃を連續で三十回いなし続けたので、その突きの威力は一発だけで三体纏めて討伐できるだけに膨れ上がつていた。

「があ、あ、あ、あ、あ、あ、！」

目の前の獲物を倒しても荒ぶるフローラの闘争本能は戦いを求めて中間層に走り出す、そこでも出会う大ムカデや芋虫型のモンスター キャタピラーを片つ端から甚振り葬り消滅させていった。

「うつ……ううううう！」

【スキル「混乱耐性大」が「混乱無効」に進化しました。】

暴走するフローラに変化が起きたのはそれから三時間ほど暴れた後だった、突如頭を押さえ苦しみだすフローラの脳内にスキル取得を告げるアナウンスが流れた。

実のところは最初の三体を相手にしていた時からずっと流れているが、強混乱の効果で頭の中を本能の濁流に流れされそれ処ではなかつた。

フローラ自身「混乱耐性大」を取得してから如何にか抵抗できるようになり、抵抗している最中は激しい頭痛を感じて喜んでいたが、身体的には相当疲労していく立つていられずに体を仰向けに倒した。
「はあはあはあ……ふふ。そつか……これが強混乱になつた状態なんだ、凄いなあんなに激しい頭痛は初めてだよ……。」

混乱の無効化スキルを取得し「激昂」が発動していくも自我を保てるようになつたフローラは満足した様な顔で空を眺める、その瞳はまだ妖しい光が灯っていたが意識ははつきりしていた。
「ん~今日は疲れちゃつたしもう帰ろうかな?」

↓ side change ↓

ネットのとある掲示板にはある書き込みが静かな話題になつていた。

『NWO』にやばい居た新人二人見つけた

1名前：名無しの大剣使い
やばい二人とも相当やばい
2名前：名無しの槍使い

k w s k

3名前：名無しの魔法使い
どうやばいの

4名前：名無しの大剣使い

二人とも西の森で目撃したんだが一人は大盾でもう一人がガントレット

大盾の方は大ムカデとキヤタピラー数十匹に取り囲まれながら佇

んでた

ガントレットの方は何か荒ぶりながら同じく大ムカデとキヤタピ
ラー数十四相手に一方的に屠つてた

5名前：名無しの槍使い

え？ 何それ w どういう状況？ あり得なくね

普通死ぬだろ w ガントレット装備は当然として大盾装備でも

6名前：名無しの弓使い

∨ 1

強力な装備だつたとか？ そこんとこどうなん

7名前：名無しの大剣使い

見た感じは二人とも初期装備だつた

思い出すだけ身の毛が弥立つわ

何で芋虫とムカデの中で平然としてられるんですかねガントレットに方に関しては若干喜んでいた様にも見えたし

8名前：名無しの槍使い

ガントレットが上級者過ぎる……

9名前：名無しの魔法使い

その状況で死なないのは二人ともダメージを無効化したか軽減させてる？ としか……

10名前：名無しの槍使い

そんなこと出来るか？

11名前：名無しの弓使い

ガントレットの方なら理論上は可能だけど難易度的にシビアで現実的じやない

大盾の方は確か β テストの時の検証で防御力に極振りしても白兔の攻撃を耐えられるだけだつたはず

12名前：名無しの槍使い

両方ゴミじやねえか

13名前：名無しの大盾使い

俺多分両方知ってるわ

14名前：名無しの大剣使い

教えてくれると嬉しい

15名前：名無しの大盾使い

プレイヤーネームは知らんが大盾は身長150無いくらいの黒髪
ショートの美少女

ガントレットは身長は170に届きそうな長身で濃い栗毛の三つ
編みの流しでコチラも美少女

二人共歩く速度からしてAGIはほぼゼロっぽい

ちなみに俺が大盾の子と同じことしたら一瞬で溶けますはい

16名前：名無しの魔法使い

大盾はやっぱ極振りか？まあ、でも隠しスキルでも見つけたとかかも
知れん

ガントレットはどうか分からんけど？

17名前：名無しの槍使い

あーそれっぽいなって言うか両方女かそれも美少女か

18名前：名無しの弓使い

ほうそこに目をつけましたか
俺もだ

19名前：名無しの大剣使い

んーまた追々情報集めるしか無いか

トッププレイヤーになるのなら自然と名前も上がってくるだろ

20名前：名無しの大盾使い

また何か見かけたら書き込むわ

21名前：名無しの魔法使い

情報提供感謝します！（敬礼）

小さな掲示板の中でフローラともう一人の少女が本人たちの与り

知らぬ間に話題になりつつあつた。

命と知恵の果実と少女

「やっぱりもつとHPを増やした方がいいね。」

ここはゲーム内の始まりの町にある図書館、スキル大全と書かれた大きめの書籍を広げてフローラは自分の希望に沿うスキルが無いか調べていた。

「ん~中々私に合ったスキルが無いね~回復系は何れは取得するつもりだけど今はなあ~。」

しかしどれだけ書籍のページを捲つても彼女の望む最善のスキルの項目は発見できなかつた、そもそもフローラがスキルの研究を始めた切つ掛けは闘魂から進化した激昂にあつた。

激昂はHPが半分になるとオートでステータスを上げられる、だがそもそも今のフローラのHPは初心者の中では確かに多い方ではあるがそれでも少し攻撃を受ければ瞬く間に半分消耗するレベルで決して十分とは言えなかつた。

「やつぱり今の二倍は欲しいよね、じゃないとあの甘美な痛みを感じる時間が半減しちゃうし。」

フローラに取つて痛覚や精神的苦痛は人生を彩るスペースと同義、痛みならば強ければ強いほど苦しみならば激しければ激しいほど彼女の心は歓喜に震える、その嗜好の時をなるべく長く味わう為ならどんな努力も惜しまないのも彼女の強さの所以になつてている、実際図書館に来る前は装備などでHPの強化を図つたのだがフローラにとつて嬉しくない防御力まで一緒に強化されてしまいならば今度はどこに訪れスキルについて調べ始めたのである。

「ふう、これにも載つてないとなる今度は人に聞いて回るかな?」

しかしそれも無駄に終わり今度は人伝に頼ろうと読んでいた書籍を抱えて本棚に足を向けた。

「さあて……ん?なんだろこの本?」

本棚に近づいたフローラはさつきまで自分の手の中にある書籍の在つた場所にいつの間にか現れていた本に目に入つた。

「生命と叡智の果実についての記録?」

読み上げた本の題名は何かの冒険録のようだった、腕の中の書籍を脇に抱え本棚からその本を抜き取ると数ページ流し読む。

「……これだ！」

軽く読むつもりで目を通りていたフローラはその内容に自分が求める答えを見て嬉しそうに顔を緩ませる、脇に抱えていた書籍を棚に戻しやや急ぎ足でテーブルに向かう。

「この世界を巡る生命と叡智を栄養にして育つ樹に生ると言う二種の果実【銀命の実】は永劫に続く命を与える【金識の実】は全能の知恵を与える……永劫に続く命、きっとHPの事だよね？って事はHPの上限を上げるアイテムが【銀命の実】って事か！」

そこに書かれた内容にはフローラの求めるHP上限の増加に繋がるであろうアイテムの情報が記されていた。

「そこへ向かうのなら霧深き森の中で真白き蛇の後を追えさすれば幻想の園エデンへの道は示される……霧深き森に真白き蛇そして幻想の園エデンか……よお～し行つてみますか！」

目的の場所を見定め広げた本を置み今度こそフローラは図書館を後にした目指すは幻想の園エデンである。

「とは言つたものの、その肝心のエデンがどこにあるかなんだよね……取り敢えず真白き蛇に会える霧深き森について聞いてみるかな？」

勇んで図書館を出てから目的地の行き方をよく調べずに飛び出した事に気が付き一瞬で勢いが萎む、取り敢えず道案内をしてくれると言う蛇が出現するフィールドについて人に聞く事にして再び歩き出す。

「う～む誰に聞こうかな～？……ん？あの人は確かに初日に邪魔してくれた有難迷惑な人……丁度いいやあの人へ聞こう。」

誰に聞けばいいのか行き交うプレイヤー達を眺めながら思案していると、視界の端に鍛冶屋の様な店に初日にフローラと大ムカデとの逢瀬に割つて入つた大盾使い男性プレイヤーの姿が見えた。

彼女自身は彼に無粹者のイメージを持つていたのだがそれでも親切にしてもらつたのも事実、だからだろうか彼になら聞いても良いだ

ろうと体を進ませた。

「すいません、お尋ねしたい事が。」

「ん?あ、ああ君はあの時の……。」

フローラが話しかけると大盾使いの男性は彼女の姿を見て最初の出会いと先日の荒ぶる姿が同時に思い浮かんだ。

「あらあら、今日はモテモテねクロム。」

「だからさつきのは誤解だつて……!」

クロムと呼ばれた大盾使いのプレイヤーに向かいのカウンター側に居た女性が彼を茶化した、その冗談めいた仕草に彼は過剰な反応を示した。

「あの……何かあつたんですか?」

「あ、いや……。」

その様子に若干引いた顔で彼を見つめるフローラ、その様子に狼狽えてしまふクロムは訳を話そうと口を開くのだが……。

「クロムつたら、さつきも可愛い女の子の初心者プレイヤーを連れて来たのよ。」

「ええ、それってまるでナンパじゃないですか～?」

「うぐつ!」

クロムが弁明する前に女性が先んじて話してしまうが、フローラはこれは所謂言葉弄りだと理解すると口調を合わせて便乗した。

「……ふくく、あはははは。」

「あははははは……クロム冗談よ冗談はははは。」

二人掛けかりで弄られてクロムが言葉を詰まらせてるのを見ると、その困り顔が面白かったのか二人揃つて笑いだす。

「なつ!おいおい、勘弁してくれよ……。」

「ふふふごめんごめん、それで見た所は貴女も初心者みたいだけど装備の制作依頼かしら?」

揶揄われた事に気が付いたクロムが参った様に呟くと、カウンターの女性が簡単に謝りフローラに話題を振つた。

「はあはあ……いえ、とある場所に行きたくてその場所の情報が無いかお尋ねしようと思いまして。」

「行きたい場所？」

「どこかのダンジョンか？」

フローラは一人に目指してゐる場所の特徴を伝えてみた。

「濃い霧の森と真っ白な蛇の現れる森のフィールドかあ、クロムなにか知つてる？」

「うん……君の話を聞く限りだが、その特徴に合致するのは北の森の深部辺りだな。」

「北の森の深部ですか……詳しく述べてください。」

フローラの話を聞いたクロムから教えられた北の森の深部とは、この始まりの町から北に方向に広がる森の一角に最初の一回だけ濃霧で視界が悪くなるフィールドがあつてその時だけ通常には現れない白い蛇のモンスターが現れるらしいのだ。

大概のプレイヤーが出現と同時に蛇のモンスターを倒そうとすると霧と共に消失してしまうらしく、その後いくら同じ場所を訪れても同様な現象が起きないのであれが如何いつた仕様の設定なのか密かに話題になっていた、攻撃せずにその後何が起きるかを検証しようとした。プレイヤー達も居たのだが、その場合でもやはり蛇は霧と共に何処かへ消えてしまうらしい。

「…………それだ！ 北の森ですね、ありがとうございました！ ええっと……」

クロムからの情報に確信を覚えたフローラ、向かうべき場所に光明が差し顔が晴れやかになる。

情報をくれた二人に礼を言おうとして、自分がまだ相手の名前を聞いてなかつたことに気が付いた。

「私はイズ、見ての通り生産職でここで工房をやってるわ。」

「俺はクロムだ、何か困ったことや知りたいことがあれば何時でも頼つてくれ。」

「私はフローラ、以後お見知りおきを。」

「人が自己紹介してくれたのでフローラも名乗つて返す。
「フローラか……なあ、若しよければフレンド登録しないか？」
「え？」

突然のクロムの提案に身を捩り両腕をクロスして全面を隠す仕草をするフローラ、その行動を見たイズがまた悪戯つ子の目をする。

「あらあら、やつぱり運営に通報した方がよかつたかしらクロム？」

「え!? あつ！ いや、さつきの発言にはそんな深い意味はなくてだな！」
さつきも同じ様な遣り取りがあつた筈だがまたも慌ただしく弁明を始めるクロム、彼はかなり人が好いからだろうか女性に揶揄われるので耐性が無いようだ。

「くす……冗談ですよクロムさん、そうですね私はまだこのゲームを始めたばかりで情報何かには疎い訳ですし……そこは一日の長、先行者である方から直接助言をいただけるのであればそれに越したことはありません……此方こそよろしくお願ひします。」

「あ、ああ。」

さつきまでの茶化した態度から居住まいを正し深々と頭を下げるフローラ、そんな彼女の変わり様にクロムは驚いて口調がたどたどしくなる。

「ふう……それじゃあ私とも、クロムが変なこととした時に報告が出来るようにフレンド登録しましようか。」

「ふふふ、そうですね。」

「おい！ いい加減泣くぞ。」

二人に終始弄り倒されてすっかり参つてしまつたクロムの哀愁に満ちた叫びが木霊した。

↳ side changes ↳

241名前：名無しの大盾使い

大盾とガントレットの少女に遭遇したというかフレンド登録した

w

242名前：名無しの槍使い
は？

243名前：名無しの弓使い
どうやつて？

244名前：名無しの大盾使い

大盾の子はログインしてきた時にめっちゃキヨロキヨロして一瞬目が合つたと思つたら走つてきて話しかけられたw

245名前：名無しの大剣使い

大盾少女コミュ力たけーなおい

246名前：名無しの魔法使い

んでその後は？

ガントレットの方の詳しい経緯も知りたい

247名前：名無しの大盾使い

ガントレットの子はもうちょっと待て

大盾の子に格好良い大盾って言われて

俺が生産職の人紹介するからついてこいつていつたら後ろからつ

いてきた

AGI低すぎて俺についてくるのもしんどそうだつたな途中何度も止まつてあげたし

248名前：名無しの槍使い

お前のAGIいくつよ

249名前：名無しの大盾使い
まあ待て今まとめる

いくぞ

大盾の子

パーティーは組んでいない

大盾を選んだ理由は攻撃を受けて痛いのは嫌だから防御力を上げたかったとのこと

超素直で活発系少女

総評

めっちゃ良い子

250名前：名無しの魔法使い
成程……でガントレットの方は？

251名前：名無しの大盾使い

その後大盾の子とは別れたんだが直後くらいに声かけられて暫くいじられた

252名前：名無しの槍使い
いじられたつてどういう事だよw

253名前：名無しの大盾使い

何か質問したくて近づいたみたいだけど直前に大盾の子連れてきた事を生産職の知り合いに弄られてそれに便乗してた感じだった

254名前：名無しの大剣使い

もしかしてガントレットの方つて性格悪い？

255名前：名無しの大盾使い

いや普通にお礼も言えるしただけ単にノリがいいだけだと思う

それでガントレットの子が北の森で初見の時だけ遭遇する濃霧の事を聞いてきたんだ

256名前：名無しの槍使い

北の森の濃霧？あの白蛇に遇うアレのこと？

257名前：名無しの大盾使い

それだよ

なんか行きたい場所のヒントがソレらしくて詳しく聞いてきたんだ

258名前：名無しの弓使い

んーガントレットは北の森の濃霧の先に繋がる何かを知つたつて事なのか？

259名前：名無しの大盾使い

わからん

ただ北の森に目指していることははつきりして

260名前：名無しの魔法使い

それ以外でガントレットの方についてわかつたことは？

261名前：名無し大盾使い

すまんがさっぱりだ

あーそれについても大盾の子見守つてあげてー

ガントレットの子が若干悪戯つ子ぽかつたから尚更そう思ううわ

あとお前らとは情報を交換していきたいと思つてるから俺の情報晒すわ

取り敢えず俺はクロムつて名前でやつてる

んでAGIなんだが20だぞ

お前らとはフレンド登録しどきてーから明日これる奴は二十二時頃に広場の噴水前に来てくれる嬉しい

262名前：名無しの槍使い

情報サンクスっていうかお前クロムかよ！

バリツバリのトッププレイヤーじゃねーか！

263名前：名無しの弓使い

よつしやその時間行けるわw

つーかAGI20に置いていかれるとか大盾は本当にVIT極振

りかもしけん

264名前：名無しの大剣使い

じやあガントレットは様子見で大盾はこれからも温かく見守つていく方向でいいかなー？

266名前：名無しの槍使い

いいともー！

267名前：名無しの弓使い

いいともー！

268名前：名無しの魔法使い

いいともー！

269名前：名無しの大盾使い

いいともー！

こうして今日もこの掲示板ではフローラともう一人の少女の与り知らぬところで二人についてもりあがつたのであつた。

神樹の試練とド？少女前篇

クロムとイズの両名から教えてもらつた北の森の深部に訪れたフローラ。

「霧が出て来たって事は、この辺りだね……。」

フローラの視界が通る周囲に霧が出始めるといよいよ彼女が探す幻想の森エデンへと続く道しるべが示された。

「君がエデンまで案内してくれる真白き蛇？」

鎌首を持ち上げた白蛇が赤い瞳を妖しく煌かせフローラを見つめる、そしてまるでついて来いと言つてゐるよう踵を返して移動を始めた、フローラは白蛇を見失わないよう注意しながら後に続く。

大分歩いたどうか移動の間はモンスターとの遭遇は無く周りも相変わらず濃い霧が立ち込めて視界が通らない風景だが、正面の景色はそれまでとは違つていた。

「ここがエデンへ続く道？」

そこは断崖絶壁に奔つた亀裂がそのまま渓谷に繋がつてもなんら不思議に感じない、フローラはその岩壁の裂け目に入つていく。

中は人一人が通れる幅の一本道になつていて、行く先は暗くまだまだ続いている。

「ほっ！」

フローラは踏み出そうとした足元に違和感を感じて飛び越える、それと同時に足元の地面が抜けて尖つた岩が現れる、先程から発動する罠の類を第六感で超えながら何処から飛び出すか分からぬ殺意の塊の初見殺しのトラップを恐れるどころか楽しんでいた。

「ふんふんふんふんふつふつふくんふふふくふふふつふく。」

その証拠にドラ○エのテーマ曲の鼻歌を歌いながら歩を進めていく、流石にワザとトラップに引っ掛かる様な真似はしない、如何にフローラがド？であろうとも……いや、ド？だからこそワザと引っ掛けなんて安易な選択はしないのだ、仮に毒沼などのフィールドギミック系ならば嬉々として進んでいったかもしれないが落とし穴や仕込み矢、串刺し床などの即死系はそのスリルを楽しむ事に醍醐味を感じ

じていた。

そしてこの洞窟の仕掛けはすべてが即死系、分かりやすい物からよく見ないと判別が出来ない厭らしい配置まですべてがすべて踏めば直接命を取りに来る、それらを発動するギリギリの位置で踏んでアスレチックに興ずるが如く踏破していくのである。

「む？ 分かれ道か？」

やがて一本道の突き当たりに到着したフローラ、その前には二手に分かれた通路がありどちらも道幅や天井の高さはこれ迄よりも広かつたそして一方は上に一方は下に続いていた。

「ここは～上に進む方だね！」

彼女の直感が告げた上へと進む進路を歩き出した、足取り軽やかに前へ前へ前進する。

ここでもトラップが仕掛けられていて床や壁から刃が飛び出したり針が付いた天井が上から落下してきたりと、あの手この手でフローラの命を奪いに来るが。

「あははは！・たつのしい～！」

当の本人はどこ吹く風まるで遊園地に来た子供の様に燥いでいるのであつた。

「おお！・これは王道的トラップ！」

そんこんなしている内に洞窟フィールドではお約束の丸岩石トラップを踏んだ、轟々と重々しい重量感を感じさせる轟音を上げ転がり下る巨大な大岩、それがギリギリまで接近するのを待つて漸く全速力で後退する。

「おほ～！・このスリル、はあはあ……サイツコー！」

ここに至るまで自分が踏んで来た発動済みのすべてのトラップを破壊しながら迫りくる大岩と、それに轟かれるか逃げ切れるかの命懸けのチエイスを自ら進んでやるフローラ、彼女がもしも同行者ありきでここに挑んでいたら同行者は涙目になつて彼女を非難しただろう、そういう意味では彼女がソロで挑戦していた事は幸運だったのだろう。

「よつ！」

結局、最初の分岐路まで戻ってきたフローラはもう一つの下る方の道に逃げ込む、そうすると大岩の方も分岐路の下に続いていた道に逸れてまた転がり迫る。

「あはははははは！ まだまだ楽しめるドン！」

無論の事ではあるがフローラはすべて分かつた上でこつちに入つたのだド？ もここに極まれりだ、下る道にはトラップは無かつたが代わりにモンスターが現れたそれも恐慌状態や呪い状態にする系統の所謂アンデット系である。

「おうふー！ この精神に来る感じは……くうー！ これもイイ！」

後方から大岩前方からはアンデット、普通の感性のプレイヤーなラゲームとは言え走馬灯に似た何かが見えてきそうな状況も、フローラにとつてはすべてがご褒美スリルと精神を揺さぶる心で感じる被虐的刺激が彼女のド？ 根性にガソリンを注ぎ続ける。

【スキル 「恐慌耐性小」 を取得しました】

【スキル 「呪い耐性小」 を取得しました】

「煩いなー今いいところだから邪魔しないで！」

彼女の脳内に流れる邪魔なアナウンスを苛立たしげに聞き流し、この緊迫した状況を存分に堪能する。

やがてそんな洞窟の道も途切れ目の前には切り立った崖と円形の天秤の皿の様な足場、そしてさらに奥にそれより大き目の丁度いま後ろから迫る大岩が乗りそうな大皿、その中間に二つに皿を隔てるように板が見える。

「よつと！」

走る速度のままに崖の淵を蹴つてその足場に飛び乗ると足場はそのまま下へ降り奥にあつた大皿がせり上がる、せり上がつた大皿が中の板を押し、押された板が崖と大皿の間にかけ橋になると後から転がり下つてきた大岩がそのまま架け橋を伝つて大皿に収まつた、大岩の乗つた大皿はいきなり増えた重量に押され急降下しその反動でフローラの乗る足場は逆に一気に上昇した

「おおー！ 遊園地の逆フリー・フォール並の急上昇ー！」

上から来る風圧と下からの浮力を姿勢を低くしながらも何にも掴

まらず体に受けるフローラ、もはやこの場所は彼女に取つてそこら
テーマパークより樂しめる遊戯施設と変わらなかつた。

彼女を乗せた足場は、空洞の天井に空いた足場の形とピッタリ填ま
る穴に入つて止まる。

「ふううここがエデンの入り口かな？」

フローラは屈めていた体を起き上がらせると目の前の入り口の絶
壁の頂上に繋がつてゐると思われる階段を見つめる、地下神殿の様なフ
ロアの端に地上に繋がつてゐるのか天井に開いた出口から光が差し
込んでいる。

ここまで経緯を含めて考へると恐らくここが最終ステージ、ボス
戦前のセーブエリアだとゲーム経験が豊富ではないプレイヤーでも
氣付く事だろう。

「よし！それじゃあ最後のひと踏ん張りいっくぞー！」

ここでの攻略も大詰めに近づいていると確信したフローラは、決意を
新たに意気揚々と階段を駆け上がる。

外に出て最初に目に映つた辺りは景色は普通の森林フィールドと
は印象の違う、何処か妖精が住んでいそうな神秘的な雰囲気を感じる
森の中だつた。

「特に変わつた所は……ないか、一応警戒はしておいた方がいいよ
ね。」

陽の光が疎らに差し込む森の中をこれ迄とは違いやつくりとした
歩調で一步一步進む、ここはおそらく未発見のダンジョンそのボスス
テージなのだ、何時何処でダンジョンボスに遭遇するか分からぬ上
にそのボスの実力も未知数となれば流石に猪突猛進で押し切るには
リスクが高いと考えた結果である。

「つー…これは……北の森の中でも現れた霧？……つは！」

見晴らしの良い森の中で急に霧が立ち込めてくる、それはこのダン
ジョンに到着する前に北の森の中で経験した濃霧に似た状況に、警戒
度を最大に引き上げ周囲に気を張り巡らせるフローラは後方から現
れたこちらに突進してくる影をガントレットでガードして受け流し
ながら後方へ飛び避けた。

「白蛇くん……君がエーデンの番人だつたんだね。」

北の森で道案内をしていた白蛇が巨大化してフローラの前に出現した、相対する双方が無言の睨み合いを続け相手の隙を伺う。

「ふつ！」

永遠とも思える沈黙を破りフローラが仕掛ける、一息で距離を詰め白蛇に肉薄した彼女はその拳を白蛇の頭部にめがけて突き放つ。

「えつ！……くつ！」

だがその拳を受けた白蛇の体は霧となつて消え、攻撃の為に体制を変えた為に出来た死角から急に別の白蛇が現れ突撃してくる、フローラは敢えて体を大振りに動かし反動をつけガントレットを白蛇の頭部に添わせる位置に動かし衝撃を使つて横に飛び退く。

「一体どうなつて？……くつ！」

白蛇の突進を往なして一瞬の思考を挟む、最初自分の前に現れた白蛇は霧で出来た幻影だつた事……そして急に現れた奇襲を仕掛けてきたもう一体の白蛇の事、状況を整理しようとしたフローラは背後から気配を感じ取つて飛び退いた、すると一拍遅れでフローラが居た地面を穿つ白く細長い体が見えた。

「……ふう、白蛇くん……君の攻撃はすっごく痛そうだね、ゾクゾクしちゃうよ……。」

色々考えてみたフローラだがそういう事はわきに置き、一先ず自分のみ願望に忠実になる事にした。

現在「ジャイアントキリング大物喰らい」と「勇猛果敢」の効果でステータスは通常時の七倍になつていて、それでも白蛇を相手にするには不足気味ではあるが無いよりかはマシだろう。

「ほつ！はつ！よつ！」

そうと決まればフローラはただ一身に白蛇からの猛攻を体で受け止め往なす、尻尾の横薙ぎを受け止め、鎌首を持ち上げて振り下ろす頭突きを受け流し、全体重を乗せた突進を寸でのタイミングで往なす、彼女の体裁きを持つてして動作は最小限でもダメージは減少させて且つ痛みはしつかり感じれるように立ち回る。

「やっぱり……軽い、まるで実態がないみたい？……つ！そう言う事

か！」

更に数十分の間、白蛇からの攻撃を受け続けたフローラは相手の攻撃に違和感を感じ始めた、と言うのも受け止めた攻撃に思つた程の威力が伴つておらずダメージにしてもそこまで痛いと感じれていなかつた、此れは如何いう事か考えた時に最初反撃しようとして霧散した白蛇の幻影を思い出すと、彼女の内でバラバラだった思考のピースが組み上がっていく。

そしてフローラは己の考えの正否を確かめる為、右のガントレットの腕を覆う甲冑を前面に突き出し白蛇に突貫する。

「すう……はあ！」

チャージタックルの要領で体当たりするとフローラが考えた通り二体目の白蛇も霧散し消失する、そしてまた死角からもう一体の白蛇が現れ急襲されるが、この時フローラは敢えて白蛇からの攻撃をガードする動作はせず上方へ跳ぶと飛び上がつたフローラを追つて白蛇も体を起き上がらせ追撃する。

「トゥーセイハイ！」

自分を追つてきた白蛇の頭を踏みつけ更に大きく跳躍、遂に木々の高さを超える霧が出ていない高度まで飛び上がる。

「……っ！見つけたアレが白蛇くんの正体……。」

森の木々の形や位置など特徴的な部分を覚えながら霧の発生源、白蛇の本体の居場所を確認したフローラはそのまま受け身の体制を取りつて落下していく。

「つとー！上から見た白蛇くんの本体の位置の方角は……あっち！」
受け身を取つて地面に着地したフローラは上から見た景色と方向を思い出しながら、白蛇の本体の居た方向に走り出す。

それと同時に分身も現れ彼女の進行を阻もうと何度も何匹も襲い掛かるが、彼女はその攻撃をガントレットで受け止め返しのカウンターで霧散させ続ける。

「はあ……はあ……はあ……抵抗が激しくなつて、と言う事はこつちに居るんだね白蛇くん。」

分身の出現頻度と攻撃がより激しくなり自分と本体との距離が縮

まつてきたと確信する、すると今度はカウンターを止めてガードに専念し始める、そして……。

「やー白蛇くん!~」機嫌いかが?』

霧を抜け白蛇の本体の前に躍り出たフローラはお道化た調子で語り掛けた、勿論体は臨戦態勢のままで……。

そんなフローラの闘気に充てられたのか本体も霧を出すのを止め臨戦態勢に入る、両者の間にこれ迄とは違う緊迫した空気が流れる、僅かな身動きが生死を掛けた勝敗に直結すると肌で感じれるほどその場の空気は張り詰めていた、その緊張に耐えかねた白蛇が先に仕掛ける。

「つーふふ……はああああ!

幻影とは違う実体があるが故の迫力に思わず身震いして笑みを見せるが、一瞬で表情を直し気迫を込めて受け身を取つて攻撃を直に受け止めHPを削り【激高】を発動させ白蛇の体を掴む。

右の拳を一度開きジャストガードで溜め続けたダメージと各スキルによつて強化された攻撃力をその右腕に集める、その力の大きさに耐えかねてなのか右のガントレットに鱗が入り今にも碎けんとしていたが如何にか一撃は持ちそうだ。

「すう……つはあああああ!

この一撃で決める! そう決意したフローラの意思が宿つた拳が白蛇を捉えた時、辺りに凄まじい衝撃が奔り右のガントレットが壊れる。

「はあはあはあ……ふふ、今の一撃は凄かつたねガードしてもお腹に響いたよ。』

お互のHPが僅かに残りはしたが双方ともに風前の灯火である、もう一撃当たれば完全にフローラの勝利は確定する……だが彼女は最後に受けた白蛇の攻撃の余韻を楽しむことを優先した。

白蛇からしてみれば今の彼女は惚けた顔で立ち尽くす隙だらけで、この状態なら打ち取る事も容易だろと思われたが白蛇からは一向に止めを刺そうとする気配が無い、それどころか頭を上げる余力もないのか微動だにしない。

「……どうしたのかな白蛇くん？もう疲れちゃった？」

騙し打ちの可能性を考慮してゆっくりと白蛇に近づいていく。

「演技じゃないみたいだね……ん？これは金の果実？」

互いに触れられそうな距離まで近づいても反応を示さない白蛇のすぐ傍に、金色のリンゴの様な果実が転がっている事に気が付き拾い上げると、そのアイテムの詳細を確認した。

未熟な金識の実

未成熟の状態で収穫された為一つしかスキルを宿せずこのアイテムで取得したスキルは一度しか使用できない。

スキル

「パーコエクトヒール」

HPを全回復する。

取得条件

「ヒール」の回復値が一定数を超える事

「……ええっと、つまり一回限りの回復アイテムつて事？」

手の中に納まつた果実を見つめながらフローラは、それ以上は何とも言えず苦笑いを浮かべる。

「ううん……私は要らないかな……えっと、白蛇くんコレ返すね。」

手にした果実を白蛇の近くに戻しフローラはその場を離れ生命と叡智の樹の在る場所を探して歩きだした、そしてまた少し時間たつた頃……。

「あれ？さつきぶり白蛇くん……今度は霧は出さないんだね。」

白蛇が再びフローラの前にその姿を見せた、だが二度目は霧を出さず本体だけで現れたのを不思議に感じた、今の白蛇からは穏やかさを感じても敵意を感じない。

フローラは敵意のない者には決して攻撃はしない、彼女が感じたいのは闘争心を剥き出しにした攻撃からの痛みであり、怯えや恐れからの破れかぶれな攻撃からの痛みには快楽よりも遺る瀬無さが勝りどうしても心から楽しめない、だから彼女は戦意を喪失したり敵意の無い者には彼女から攻撃する事は無いのである。

そんな彼女に何かを思ったのか白蛇は、閉じていた口を開き下を

使つて赤い液体の入つた瓶と白く透き通つた抜け皮を渡してきた。

ナーガの血薬

使用者のHPを回復しナーガの固有スキルを取得できる秘薬

ナーガの抜け皮

ナーガの脱皮した皮

生命と叡智の神樹の下まで持つていくとなにかが起きるらしい。

「これを……私に？」

白蛇から渡された二つのアイテムに交互に眺めそのまま自身の前に佇むナーガに問うと、その質問を肯定している様に頭をフローラに擦り付けた。

「あはははは、撲つたいよナーガくん……ありがとね、使わせてもらうよ。」

「スキル「ミストイリュージョン」を取得しました」「スキル「ダメージアブソーバー」を取得しました】

フローラはそう言つて血薬を飲んでHPを回復し、同時にナーガの固有スキルも取得した。

「ミストイリュージョン」

自身の周囲に霧を発生させその範囲の中で自身の幻影を出現させる。

出現した幻影は相手から攻撃を受ければ消失するが効果範囲内ならば何度でも再出現させることが出来る。

また幻影の数は霧の中に居る人数に応じて増加する。

取得条件

ナーガをHPドレインで倒すかナーガの血薬を服用すること。

「ダメージアブソーバー」

自身がダメージを受けた時に発生したダメージと同数値分MPを増加する。

取得条件

ナーガをHPドレインで倒すかナーガの血薬を服用すること。

「おおく一方はHPに関係するスキルかあ……ん?どうしたナーガく

ん？」

血薬に宿った力が見事に自分に適したスキルであつた事に運命めいたものを感じて感慨にふけるフローラ、そんな彼女に側頭部を向ければ乗れと言つてはいるようだつた。

「もしかして、連れて行つてくれるの？」

彼女の質問に何も言わないが瞬きで答える、その仕草を見たフローラは迷うことなくナーガの頭の上に乗つた。

「それじやあ、神樹の元までよろしくねナーガ君。」

その掛け声に応えるようにナーガは頭を上げ神樹の在る方角に進み始めた。

神樹の試練とド？少女後編

ナーガの頭の上に乗り光溢れる森の中を進むフローラ、その行く先は生命と叡智の神樹。

「ねえナーガくん？今行こうとしている生命と叡智の神樹つてもしかしてあの崖の上にあるの？」

彼女の視界はナーガの頭の上に居る分高くなっている、その位置に居ても見上げるだけでその頂の端だけしか見る事が出来ない絶壁が聳え立っていた。

もしもフローラがナーガを討伐していた場合この景色を拝むこと自体不可能になつていたし、何より自分がまだエデンの入り口にすら立てていなかつた事にも気付けなかつただろう。

「やっぱり一筋縄にはいかないな、でもあの岩壁を登るのは楽しそうだね。」

遠方からでも分かる鋭角に切り立つた斜向と掴まれる足場が殆どない岩肌、その威容を眺めあの崖を登頂する為にどれだけ多くの精神力と労力を削られるのかと考え喜悦の表情を見せる、そんなフローラを連れてナーガは目的地へと辿り着いた。

「ふへへへへーと！到着したのナーガくん？おーい……。」

ナーガが一旦頭を下げフローラを地面に降ろすと眼前に広がる崖壁の影になつて視界の通らない谷に向かつて長い体を移動させ始め、その後をフローラが追いかけた。

「横穴？ここから上に行けるの？ねえナーガくん。」

谷の根元にナーガの巨体でも通れそうな横穴があり、フローラは傍に控えるナーガにそう尋ねたが質問に答える様子はなく横穴の中へ入つていく。

「そつか、ここからでも行けるんだね……でも、やっぱり私は……。」

ナーガの一連の行動を無言の肯定と捉えたフローラ、だが彼女はナーガの教えた横穴を一度だけ見つめると次にすぐ横の険しい岩肌に視線を移しそちらに歩を取る。

「折角のスリル満点のシチュエーション、これを楽しまずにはいられま

すか!!」

そう言つて岩肌の僅かな凹凸に手を掛け頂上に向けて登頂を開始した。

命綱なしのロッククライミング、更にここは標高もそれなりで登れ登るほど落下死のリスクが大きくなる選択、フローラは自滅願望がある訳でも自殺志願者でもない唯の純粋なけれども度が過ぎた被虐趣向者だ、だが己の被虐的琴線に触れる状況には愚直と言われようと従う事も間々ある事ではあった、特に彼女が困難で過酷であると直感した事柄には満面の笑みで向かっていく。

「ほつーほつーほつーふう……うつひやー！結構登ったね～もう地面が見えないよ。」

ある程度の高さまで登りついたフローラは丁度休憩できそうな広めの起伏に腰を休め、自分がどこまで登ったかを知る為に真下を見下ろした。

眼下に広がる景色では既に地面が見えず鬱蒼と茂る木々だけが広がっている、普通の思考回路をした人間はこの状況で足を竦ませるのだろうが、フローラにはその一時の恐怖ですら己を突き動かす動力源となるのである。

「さて……休憩終わり！先はまだまだあるぞ……ん？なんだろアレ……。」

登頂を再開させようと立ち上がったフローラは、目の前に広がる遮蔽物の無い空に細長い生物の様な影を発見した、その影は上下に体をくねらせながら接近してその姿がはつきり見えてくる。

「ん~アレは……銀龍？」

銀の体表が日光を弾き眩く輝く東方龍がその長く巨大な体躯を撓らせ悠々と飛来してくる、その体からは電気が流れているのか時より放電の光が瞬いて見えた。

「こっちに向かってきてる……よね？どう考へても。」

その姿が大きくより鮮明に視認出来ている事実を銀龍が接近していると捉えたフローラは、一旦崖を上の止めて防御の構えを取る、それ呼応するように銀龍も彼女の真上の位置に口から雷撃を放ち崖

を崩して岩雪崩を起こす。

「くう～こう来るか～。」

上から砂埃と大小様々な大きさの石礫そして岩塊が降り注ぎ辺りの視界を塞いだ、フローラは小さく蹲りそれらをやり過ごして、一通り上からの落下物が収まると体を広げ辺りを確認して安全を確認し再び崖登りを開ける。

それからもフローラが休憩を挟む毎に銀龍の到来し何かしらの妨害を行つてきた……雷撃による崩落は勿論の事、崖に体当たりして彼女を足場から落とそうとしたりあの手この手でフローラの行動を制限してくる、その何度も目になるかの妨害をやり過ごしたフローラは銀龍の行動に疑問を感じ始めていた、と言うのも……。

「やつぱり……妨害にしては手緩いよね？」

普通に侵入者を撃退しようとすれば無防備で回避が出来ない例えば、今の状況であるならば崖をよじ登つている時などに急襲すれば確実に地表まで落とせる、だが銀龍は必ずフローラが一呼吸挟むタイミングで現れ襲撃してくる、ここまで落とせるタイミングは幾度もあつたがその一度として銀龍は現れず呼吸を整えて安息している言わば余裕のある時を見計らつて彼女の前にその姿を見せるのだ。

「妨害 자체はフリ？じゃあ、銀龍くんの本来の目的は……そう言う事かあ～。」

今フローラが居る地点は細いながら足場が続いている、そしてその行く先の終着地点にはナーガに最初に案内された横穴と似た道がある、銀龍の狙いはそこに彼女を誘導しようとしているのだろう。

「つんくくく！行くなと言わると往きたくなるのものだよね！いいよ銀龍くん！私は是が非でもこの崖を攻略するよ、ここからは根競べだ！」

実はド？な上にかなりの負けず嫌いなフローラ、銀龍の好意を逆に挑発と受け取り敢えて絶壁を己の力で攻略する道を選んだ。

しかし、彼女の選んだ道は何よりも険しい道である、このどこを見ても微かな突起だけで身を隠せる遮蔽物が無い断崖と定期的に襲来する銀龍の妨害、やはり普通の攻略者なら心が折れて安全を取るだろ

う……だが！しつこいようだが何度も言おう、フローラはド？だ！度が過ぎてしまつた被虐性癖者には苦痛も困難も心を突き動かす何よりの燃料である。

彼女は見る者に絶望を与える絶壁にすら心震えた恐怖にではない歓喜にだ、そんな状況でさらに度々現れては進路を塞ぐよう襲い来る圧倒的強者の存在、最早彼女の表情は喜色に歪み到底人前には出せない顔をしていた。

「ふふ、ふふふふ、ふふふふふふ、楽しいなあ、楽しいなあ！」

狂喜の雄叫びが彼女以外の生物などいない絶景の中に響き渡る、下を見れば森が広がり上を見れば紺碧の空がどこまでも続くこの景色に遮る物など何もない、あるのは遙か頭上まで聳え立つ絶壁と偶に進路妨害と言うなの粹なおもてなしをしてくれる銀龍のみ、だからこそフローラは折角のもてなしを心ゆくまで堪能しようと考えたのである。

そこからの彼女を警え直ぐ傍に人が居たとしても阻める者は居なかつただろう、それ程に彼女の行動は一貫していたのだ、それまでも可成りのハイペースで登頂していたクライミングがさらに早くなり休憩も度々挟んでは銀龍の到来を心待ちにした。

そして、遂にフローラは辿り着いた地に聳え立つ断崖を超え、幾度となく襲来する銀龍の妨害にも屈する事無く、頂に何処までも咲き誇り広がる一面の花畠とその中心に威風堂々と圧倒的な存在感を示す強大な大樹、誰もが何も言わずともアレが目当ての生命と叡智の神樹だと理解できるだろう。

「ふふ……楽しかった、それじゃあ後は……君の相手をしてから、あそこに向かおうかな銀龍くん？」

花畠に背を向け崖淵に視線を向けるフローラ、その方向にはその体が放電の光で閃き輝く白銀の龍が待ち構えていた。

「…………ツフ！」

長い沈黙を続けながら体は前に向けゆっくり後方に歩を取つていたフローラは、ある程度後退して銀龍に背を向け駆け走ると、それが合図だつたのか銀龍もフローラの後を追い彼女に背に電撃を浴びせ

る、落ちてくる電流を速度を落とし横に逸れて躱し再び走り出すフローラ、そのまま蛇行しながら走り続け電撃を搔い潜り直接的なダメージは避けつつ余波で発生した土塊を受ける事でダメージを蓄積していく。

「君のその雷は今の私もHPじゃ受けられないからな、あくあ勿体ない。」

本心から残念がつている表情を浮かべるフローラ、しかしそれも仕方ない銀龍の雷撃は現在のフローラのHP量では一瞬で溶けてしまう。

更に言えば今の装備は片方の武器を失いステータスが半減している状態だ、強化スキルが発動している現在でも攻撃と防御更に移動速度にも大きな影響を受けている、最もフローラ個人としてはよりダイレクトに痛みを感じる事が出来るからか嬉しい誤算だったようだが。「うは～流石の威力～！飛んでくる礫一つ一つでも結構痛～い！」

嬉しそうな悲鳴を出して走り抜けるフローラ、彼女が走った後の地面は抉れ咲いていた花は散り乱れる、折角の美しい景色もフローラと銀龍の戦闘……いや逢引の前では惨状になる、辺りの風景を無残なものに変えて彼女たちは巨樹を目指して殺意を多分に含んだじやれ合いを続けた。

「つとーここまでか……いつよし！逃げるの終わり！HPもいい具合に削れたらしMPも貯まつた、ここから反撃と行きますか！」

そんな追い駆けっこも中央の大樹の麓に辿り着き終わりを告げた。闘争の間にHPを削つて「激昂」を発動させ、「ダメージアブソーバー」の効果でダメージをMPに変換させた、とは言え未だステータス的には万全ではない以上、ジャストガード・ジャストカウンター双方のダメージ増加を狙わなければ銀龍と直接対決の勝率は限りなく低い、だがフローラにそんなことは関係ない。

「あはははは！すつづいピンチ……はあはあ、たつのし～！」

被虐性癖それ言いかえれば逆境的状況に対しても異常な耐性がある事を意味する、ごく普通の感性を持つ人種であるなら過度な痛覚や周囲からのプレッシャーそれらを感じる環境に長く居続ければ精神に

異常をきたす事がある、だがフローラの様な被虐性癖を持つ人種にとつては水を得た魚と同じ、多くの人からすれば絶望的な状況が彼女達から見ると最高のシチュエーションなのである。

「ふつーぐううう……はあはあはあ、やつぱりこれまで感じてきたどの攻撃よりも反動が大きい。」

ここに至るまでずっと避け続けた放電をガントレットに受け止めダメージを蓄積し始めたフローラ、だが銀龍の放つ電撃は彼女がゲーム開始からその身で受け続けたどの攻撃よりも強烈で重い、幾らダメージを1に抑えても反動だけは消し切れず後方に吹き飛ばされる。

【スキル「バイアップチャレンジ】を取得しました】

「つ！ 今度はどんなスキルかな～！」

【バイアップチャレンジ】

ジャストガードで発生した蓄積ダメージを二倍にする、だがジャストガードが失敗すれば倍加したダメージはこのスキルの使用者に反射する。

取得条件

HPが半分以下で一定以上のダメージをジャストガードで防ぐこと。

ここに来て新たに得たスキルはフローラの劣勢を覆しえる力、だが同時に敗北のリスクも孕んだ諸刃の剣……【激昂】にもリスクはあつたがそれでも克服出来なくは無いもの、しかし「バイアップチャレンジ】には蓄積するダメージ量を増やすと当時に通常受けるダメージが二倍の数値で返つてくる、失敗が直接の死に直結したチキンレースだつた。

「……にひ、うんうん！ 分かってるね～こう言うのだよ、私が欲しいのは！ 【バイアップチャレンジ】！」

彼女の被虐嗜好はそのリスクすらご褒美だと言い放った様に喜々してスキルを発動する、落とされる雷撃をガントレットに受け後退するフローラ、木の根に踵を落とし下半身全体で強く踏ん張る。

「ふうふうふう……すううううはつ！」

迸る電光を受け止め息を吐いてタイミングを計る、そして電光が途

切れる瞬間に深く息を吸い込み吐くと同時に全身に力を籠め振り払う……反動は無い、たつた一度それも予習も無しのぶつけ本番、失敗すれば死と言う状況下でフローラは「バイアップチャレンジ」を成功させた、だが吸收した力が大き過ぎたのか残ったガントレットに鱗が入り始めた。

銀龍はそれを見て好機と捉え体に電気を纏い突撃を仕掛ける、対するフローラも長くは持たないと考え戦いを惜しむ気持ちを抑えて決着を着ける為に動く。

「ミストイリュージョン」！

ナーガから受け取ったスキルを発動させ自身と銀龍の周りに濃霧を発生させる、立ち込めた霧の中でも迸る電流の光が銀龍の居場所を示す、フローラは巨大な木の根を足場に光り輝くその場所の真上に向かって飛んだ。

「はああああああ！」

重力に引かれ落下するフローラは渾身の力を左腕全体に籠め、自分の幻影と戦う銀龍の頭部に目掛けて振り下ろした、フローラの放つた一撃の衝撃が突風を起こし霧を払い巨木を太枝をも大きく揺らし、銀龍を地に叩きつけフローラも風に煽られて巨樹の幹に打ち付けられる。

「はあはあはあ……んく！」

打ち付けられた痛みで悦に浸るフローラだがやはり攻撃の反動はあつたのか暫く動けなかつた、そこから漸く歩けるまでには回復して銀龍を叩き落した地点まで移動すると、ナーガの時と同じ様に銀龍の傍にも銀のリングが落ちていた。

「……それも未成熟なんでしょう？私は要らないよ銀龍君……。」

今度はリングには見向きもせず銀龍の元を離れ歩き出した。

「それで、ここからはどうすればいいのかなー？」

一応生命と叡智の神樹と思わしき巨樹の周囲を注意深く観察しながら探索するフローラ、その背後に何か細長い影が近づく。

「……ナーガ君に統いて君もかな銀龍君？」

このパターンは二度目だからか何かを察したフローラは振り向き

近づいてきた影の正体に語り掛けた。

彼女と向き合う形で浮遊していた銀龍はやはり何も言わずに何かのアイテムを差し出してくる、銀色の鱗と黃金色の勾玉を受け取つた。

【ククルカンの鱗】

ククルカンの体表を覆う鱗。

生命と叡智の神樹の元に持つていくと何が起ころる。

【ククルカンの雷宝珠】

ククルカンの喉に複数存在する雷の力を宿した宝珠。

ククルカンに認められた者だけが入手出来る、これを装備している間はククルカンの固有スキルを使用できる。

【電撃鱗】

HPをダメージとして消費して電磁結界を発生させる。

電磁結界を敵対対象に接触させるとダメージを与えられる。

【マギアコンバートライフ】

MPを使用してスキルを発動した時、使用した分だけHPを回復する。

「成程、ナーガ君のスキルと対になつてる訳だね。」

「電撃鱗」でHPを削つてMPを貯め、貯まつたMPを「ミストイリュージョン」に使用してHPを回復する、ナーガとククルカンの固有スキルは相互関係がある事、そして一体に止めを刺さなかつたフローラだからこそ二体から直接アイテムを譲渡されその事に気付けていた訳だ。

「それで、これを渡しに来ただけじゃないよね？ククルカン君が來たつて事は、神樹の根元に来ただけじゃ何も起きないのかな？」

ここに来る前の森でナーガに連れられてこの高台に辿り着いたのだ、となればククルカンがフローラの前に現れたと言う事はそれ即ち神樹の元迄辿り着くことがゴールではないと言う事、その証拠にククルカンもまたフローラを自身に乗せようと高度を下げて側頭部を彼女の目の前に出した。

「よいつしょ、それじや次なるステージへ行こうじやないか。」

フローラもこういう事は二度目なので慣れた様子でククルカンの頭部に乗り次なる場所を目指す、フローラを乗せたククルカンはそのまま神樹の幹を沿つて上へと上昇し始め太枝の密集した個所へ入つていく。

「樹の中に祭壇……そつか、ここがこのダンジョンのゴールはここなんだ。」

ククルカンに連れられ到着したのは生い茂る枝葉の中に安置された祭壇で、その祭壇の中心の小さな社に黄金と白銀の二種の果実が鎮座しているのが見えた。

「ん……ここまでありがとククルカン君。」

ククルカンに祭壇の手前で降ろしてもらいそちらに向けて歩みだす、近くで見るとなかなか立派な造りの祭壇であり周囲の風景と相まって幻想的な厳かな空気が流れている。

『よくぞここまで来た、試練を挑み超えた者よ……。』

フローラが祭壇の端に足を掛けた時不意に声が聞こえた、男とも女つかず幼い子供の様にも年老いた老人の声にも聞こえてくる不思議な声だ。

「貴方は誰？若しかして神樹さん？」

『うむ、私自身で見れば確かにそうだ……だが全体で捉えれば厳密には違うとも言える。』

行き成り聞こえた何処から話してるとも知れない相手にフローラは慌てる素振りを見せずに質問したが、漠然とした返答が返つてくる。

『この樹、生命と叡智の神樹は幾つかある創世の神樹から別れ育った枝木の一つ……つまり私自身は神樹と呼ばれる存在ではあるが、他の兄弟たちを含めると本当に神樹と呼べるのは親樹である創世の神樹のみ……私は創世の神樹から生命と叡智の力を分けられたに過ぎない。』

「…………つまり、貴方は神樹と呼ばれてはいるけど厳密には神樹では無い、貴方には親と呼べる樹があつてそれが本当の所の神樹様って事？」

神樹の意思が語った自身の設定をフローラは自分なりに整理し出した見解が正しいか聞いてみる。

『大筋はその通りだ、そして我らには其々に親樹からこの世界を構成する力とそれに対応する試練を預けられた、私には生命と叡智の纏わる試練がな……。』

「えつと……その試練って言うのが、最初に言つてた私が攻略したつていう奴？」

かなりシユールな状況だ、神樹の分木の中の一つとは言えそれでもこの世界^{N_W}を構築している要素の一柱を担う意思との遭遇なにも関わらず、フローラは臆する事も無く対等な立場からの口調で会話をしていた。

この状況なら普通のプレイヤーは訝しむか逆に興奮して、少なくとも彼女の様に平静ではいられない筈なのだが……。

「んんん!!何、光が集まつて……装備?」

神樹の意思との対話の最中フローラの体を粒子の様な光が覆い彼女の全身を包む装備に変化した、両腕と両足には白の無地の籠手と足が装着しており、胴には白地の胸当てとスケールメイル腰からは同じく白マント、頭には木の葉の冠と白いベールが存在感を示していた、すべてが無垢な純白の幼さと純真性を持つ装備を身に纏うフローラから神秘的なオーラを感じる。

『それは試練を超えた選ばれた者のみが身に付けられる選定者の証、この階層に唯一のみ存在する創世の神樹の力の一端だ。』

オリジンシリーズ

その階層に存在するユニーカシリーズの基になつた装備。

装備した者の経験や戦闘スタイルによつて進化していくと言われており各階層に一つの神樹に一組のみ存在する、取得した者はこの装備を譲渡できない。

【神樹の冠（未覚醒）】

【M P + 4 0】【I N T + 1 5】【破壊進化】

【神樹の軽鎧（未覚醒）】

「H P + 4 0」 「V I T + 1 5」 「破壊進化」

【神樹の籠手（未覚醒）】

「S T R + 1 5」 「D E X + 1 5」 「破壊進化」

【神樹の腰マント（未覚醒）】

「V I T + 1 5」 「I N T + 1 5」 「破壊進化」

【神樹の具足（未覚醒）】

「A G I + 3 0」 「破壊進化」

【（未覚醒）……進化する装備か……。】

【破壊進化】

この装備が破壊した時この装備に蓄積された経験値を基に強化修復され形状とステータス及びスキルを変化させる。

修復は瞬時に行われるため破損時に数値上は影響はない。
すべての装備に（未覚醒）とあるのは前述にある通りこれらのフローラ次第で変化していく事を、彼女は装備の効果の欄を見つめて呟いた。

『そしてこれが、私から君に贈れる物だ受け取ってくれ。』

神樹の意思がフローラにそう伝えると祭壇の中にあつた二つの果実がフローラの下に飛んでくる。

【金識の実】

生命と叡智の神樹に生る知識の実。

食べた者はランダムに三つのスキルを取得できる。

【銀名の実】

生命と叡智の神樹に生る命の実。

食べた者は自身のH P の最大値が三倍になる。

「金識の実と銀命の実。未成熟じゃない本物……ついに！」

フローラがここに来た理由であり目的の品の金識の実と銀命の実を手にして暫く感慨に浸り、その後銀命の実から齧り続いて金識の実を齧る。

『スキル「完全抗体」を取得しました。』

『スキル「リベンジソウル」を取得しました。』

『スキル「正拳」を取得しました。』

金識の実の説明にあつた通り三つのスキルを同時に得た事を告げるアナウンスが流れ、今度はどの様なスキルなのかと早速確認する。

【完全抗体】

全ての状態異常に対し耐性大効果が発動する。

【リベンジソウル】

このスキルは発動してから効果発揮までを任意のタイミングで行う事が出来る。

一旦発動を宣言してから効果発揮までに自身の削られたHP量と同じ数値分全ステータスが反撃時に上昇する。

【正拳】

このスキルの保有者はHPが全快状態から半分以下になると全ステータスが60%上昇する。

HPを回復すると効果は終了する。

「うんうん、どれもいいねえ！」

取得したスキルは全てフローラに取つて好相性だつた事に満足そうに表情で何度も頷き笑みを浮かべる。

『最後に十二刻の守護獣に認められた証を持つ者は必ず送る事になっているこれもも渡しておく。』

「腕時計？違うな腕輪だ……ん？ナーガ君の抜け皮とククルカン君の鱗が反応して……えつ！」

最後に贈与されたのは腕時計の様に見えるブレスレット、そのブレスレットがフローラの手に渡つた時彼女の持つナーガの抜け皮とククルカンの鱗が光を放ちブレスレットの中に吸収され、突然のことでも驚くフローラは何が起きたか知る為にアイテムの解説欄を開いた。

【十二刻守獣召喚盤】

十二刻の守護獣に認められた者だけが所持する事が許される装飾品。

守護獣に認められた証を読み込んだ守護獣の分身を呼び出し攻撃支援または憑依させて其々の能力を引き出す事が可能、但し一度に呼べる分身は三体までである。

「召喚可能：辰巳」

「これはつまり……深く考えないようにしようじよつと！」

式神か従魔を複数体の使役し直接戦闘なり憑依しての能力付与、それは控えめに言つてもチートアイテムであり更に額面通りに受け取れば現在の二体にあと十体を合わせ合計十二体の分身を従わせる事が出来るのだ、流石のフローラも目を背けて見なかつた事にしたいらしい。

「はあ、今日もいろいろあつて楽しかつたけどつづかれた、今日はもう帰ろつと。」

そう言うと出現した転移ゲートの上に移動して一路始まりの街へ帰つていた。

ド？少女の毒竜

フローラが生命と叡智の神樹の下から帰還して一日が過ぎた明くる日、全身を純白に包んだ一見すれば聖女と見紛う美少女が一人、昨日とは違う方角へ歩み進めていた。

「こつちかな～ヒドラって毒竜の居る洞窟の方向は？」

彼女の今日の目的地はヒドラと言う猛毒の攻撃を仕掛ける多頭龍が出現するダンジョンだった、前日の戦闘相手のナーガとククルカンとは一度倒れ抵抗しないまたは出来ない相手には攻撃を行わないと言ふ彼女自身のポリシーもあつて結局最後まで戦う事は無く彼女自身が不完全燃焼気味の逃走本能にヤキモキしていた為である。

「それにしても、またクロムさんにたよちやつたけど良かつたのかな～？」

そんな事を呟きここに来る前の始まりの街での出来事を思い返すフローラは、今日の目的地の情報を教えてくれた先輩プレイヤーの姿を思い浮かべた。

ヒドラの居るダンジョンの事をフローラに教えたのはクロムであり事の始まりは、フローラが抱えた欲求不満の捌け口を求めて良い発散場所は無いかと情報を集めていた時の事だった。

『あ～あ！無性に暴れたいなあ～！痛みを感じたいな～！昨日の神樹の試練が思つたより戦闘が大人しかつたから尚更だよ～！』

そう心の中で叫びながら他のプレイヤーから話を聞いたりして情報を集めていたのだが、質問しようと近づいたプレイヤーの多くが話をする前にフローラの姿を見ると遠慮がちな態度で離れ、話が出来そうな相手も大体が露骨な口説き文句を事あるごとに吐き、眞面な情報教えてくれるプレイヤーはほんの少数だけなので結果はあまり良いとは言えない状況だつた。

「あれ？フローラじやないか、どうしたんだこんな所で？」

「つ～…クロムさん。」

人伝の情報が芳しくないの結果に露骨に意氣消沈していた時、NWOを始めた時から何度も世話になつた相手であるクロムに声を掛け

られた。

「あの……いえ、何でも。」

「ん? 何だ、何か聞きたい事でもあるのか? なら遠慮なく聞いてくれ。」

神樹の所在のヒントをくれたクロムなら他にも有益な情報を知っているかもしないと思い質問しようとしたが、これまで散々世話になつた相手にこれ以上縋るのも憚られたフローラは口を閉ざしたが、クロムの方が彼女の意図に気が付いて逆に聞き返してくれた。

「え!? でも……。」

だがそれでも好意に甘える事を厚かましいと感じるフローラには、彼からの提案にまだ抵抗がある。

「何だ遠慮してるのか? なら気にするな、俺が君に親切にするのは俺がそうしたいからなんだからさ。」

そんな彼女にクロムは笑顔で胸を張り實に誇らしげに自身の行為を自己満足だと言いのけた。

「……ふつ! はははは! そうですね、『ほどこせし 情けは人の為ならず 己が心の慰めと知れ』ですよね。」

「ん~? それって、情けは人の為ならず』だよな、前後の言葉には覚えがないが。」

フローラの聞きなれた諺に似た聞きなれない言葉に、クロムは首を傾げ彼女の聞き返した。

「あ~あ! そうですね、その諺の原文の一つじゃないかつて言われてる新渡戸稻造の詠つた詩なんです。意味は、人に親切にするのは人の為ではなく自身が満足したいが為にやつてている事だつて言つてるんですよ。」

「成程! 潔くていいな……うん、つまり俺が君にする施しは全て俺の自己満足つて事だ。」

彼女の説明を聞いたクロムがその意味を知ると、納得のいった表情でその考えを肯定する。

「フフ、それじゃあお言葉に甘えさせて貰いますね。」

「おう、何でも聞いてくれ。」

彼女に頼りにされたいと言うクロムの意思を汲み、彼を立ててその場は素直に甘える事にしたフローラは自分が今何を求めているのかを聞いた。

「ふむ、つまり入手した装備とスキルを試せる手ごろなフィールドを探しているって事でいいのか？」

「はい、他の方にも聞いても割ったんですがどうにも……何処か良い所を知りませんか？」

フローラの話の内容を要約し彼女が要求している情報がどういった類なのかを見当をつけたクロム、自身の見解が合っているかを質問すると肯定する返事が返つてくる。

「うん、今のフローラの装いで聞き込みをしたら確かに気後れするよな……事情は分かった、フローラの希望に沿うかは分からぬから確實にお勧めできる訳ではないが幾つか心当たりはある。」

「本当ですか!!」

クロムが何やら小声で独り言を呟いた後、目の前のフローラが求めている本日の狩場の候補に心当たりがある事を告げると、彼女は食い気味な姿勢で質問を返した。

「お、おお……ここから一番近い場所だと、初期マップの森とは反対方向に『毒竜の迷宮』って洞穴のダンジョンがあるんだ、ボスモンスターは厄介だけど出現するモンスターも大して強い訳じやないし初心者向けのダンジョンだぞ。」

「ふむふむ……『毒竜の迷宮』ですか、じゃあ今日はそこに行つてみますね……あつ、クロムさん情報ありがとうございます。」

クロムから話を聞いたフローラは早速町の外へと体を向けて移動を始めたが歩みを止めてに振り向き、笑顔を見せてお礼を告げそのまま目的地に向けて再び移動を始めた。

そして現在、クロムの情報を頼りにして目的のダンジョンの搜索を続けるフローラ。

「ううん……まあいつか、だつて“我れ人にかけし恩は忘れてもひとの恩を長く忘るな”だもんね、ゲームを続けていれば何時かは恩を返すタイミングもあるよね。」

クロムに教えた新渡戸稲造博士の詩の続きを語るフローラ、序に意味は自分が親切にした事は忘れても人から親切にされた事は覚えていなさいと言つてゐる、そういうしてゐる内に目的の洞穴らしき場所を見つけ探索を開始する。

「さてさて、どんな相手が出てくるかな？」

さつきまでの回想を区切り目の前の洞穴の入り口に意識を集中させ、これより始まる新たな被虐的体験に胸を高鳴らせる。

一步踏み込むと定番のスライムや如何にも毒持ちの生物を彷彿とさせる様相のトカゲのモンスターが行く手を阻む。

「きたきたきた！スライム君にトカゲ君かあ、よろしくお願ひします！」

最早ルーティーンとなりつつある何時もの構え、あえて相手の攻撃を受け止めるための低姿勢からの形だけファイティングポーズ、誰が口火を切つたかスライムの先制の突進を仕掛け次いでトカゲもそれ続く。

「ん！連携で来るか～確かに、一体ずつで相手をするより効率的だね！いいよいよ、じやんじやん来てよ！」

二体の攻撃を体全体で受け止めその衝撃を全身に感じたフローラ、彼女の表情は早くも情欲に沸き立ち始め締まりのない笑顔を見せる。以前よりも大幅に増加したHPが少しづつ削られ、その度に発生するむず痒い痛みが彼女の神経に甘い快楽となつて刺激を送り続ける。

「あん！ああ！あ～ん！」

スライムの粘質の体が胴に当たる度……トカゲの爪や牙が体を穿ち抉る度……フローラの口から歓喜の喘ぎが零れ落ちるその様は、淫猥な雰囲気を辺りに漂わせもし偶然にもこの光景を見る者が居たらば恐らく性癖を捻じ曲げかねない状況を作り上げていた。

「ふうふうふう……つんく！……はあはあはあ、あれ？どうしたさ君達、さつきから攻撃の手が緩いよ？ほう……もつとガンガン来てよ！」

フローラの尋常ならざる雰囲気に押されたのか果敢責めていた二体のモンスターの攻撃が途端に緩慢になり勢いを落とし始めた、二体

の攻撃を一心に受けていたフローラは攻勢が緩んだ事に不満げな表情を浮かべて更なる激しい攻撃を要求する。

「……そっか、あははは！ごめんね、一方的な勝負じゃつまらないよね……分かった、ここからはちゃんと反撃するね。」

そう言うとフローラの纏う空気が変わる、先程までの彼女が受けに全てを注いだ守りの被虐だとしたなら、今の彼女は反撃を誘発させるために敢えて反撃を返す攻めの被虐、一見すればド？とは真逆のD/Sに見える見敵必当の構えであり彼女が真剣勝負に臨む際に取る戦闘スタイルであった。

「ふつー……くうー！はつー……はあーん！」

此方が当てるつもりの無い反撃を繰り出す度、二体は呼応するように攻勢を仕掛け再びフローラの艶めかしい喘ぎが漏れ聞こえた。

やがては二体と一人の興が乗ってきたのか遣り合いが激しくなり、何手かフローラの反撃が当たりだと遂にスライムのHPが尽き消滅しそのすぐ後にトカゲの方も後を追うように倒れた。

「ええ……折角いいところだったのに、仕方ない次の相手探すか。」

ダンジョン内の初戦の相手が居なくなり、次の相手を求めさらに奥へ進んでいくフローラ。

そして狭い通路を進み開けた空間に出た彼女は、その場の中央に自然に群生する植物を発見した。

「毒竜を冠するダンジョンに唐突な緑……怪しいねえ？あからさまな罠だよねえ？罠なら引っかかるないなあー！」

フローラの興味は常に被虐の刺激を望む、普通の見識を持つプレイヤーならば怪しんで近づかない草木生い茂る緑の絨毯の上を躊躇う事無く進み入り、緑一色の中でも一際存在感を見せる紫の花の前で身を屈める。

「見るからに発動のキーはこの花だね、よしそれじや行つてみよー！」

フローラが花の一つを指先でつつくと、花弁を萎めて紫色の粉末を勢いよく噴霧させそれに続くように周囲の花も毒の粉をばらまく。

「けほつ！こほつ！あははは、刺激を受けると毒性の花粉を放出するのか、それも連鎖的に……つて事はこの一帯は根で繋がってるのか。」

立ち込める毒霧に咽ながら冷静に状況を分析する、「完全抗体」の影響で毒を含めたすべての状態異常に耐性を持つが故の平静だが、それでも煙たさは拭えず多少息苦しいらしい。

「ふむ……ケホケホ！如何やらギミックはこれだけらしいね、コホコホ！それじゃあ先に進もうか。」

毒粉舞う空間をゆっくり歩きだし煙が晴れる頃、次なるトラップに遭遇した。

淀み切つた汚泥に似た怪しく濃い紫色を称え時折炭酸泉宛らに水面で気泡が破裂する様は人が想像しうる限りで誰しもが最初に思い浮かべる毒沼の風景そのものだろう。

「今度は毒沼だね！くぅ～！よしよし、ガンガン行こうぜ！」

何も恐れる事は無いフローラには通常避けて通るべき毒々しい水面を踏み抜き一步一步深みへと歩を進める、ぬかるむ沼底に足を取り思つよう動けずゆっくりとしか進めなかつたがその焦れた心境ですら歩を進める原動力に変えていた。

「ふつー・ふつー・ふつー・ワッ普！何リ？」

毒沼も中程まで進み残り半分まで行き着いて腰の辺りまで沈んでいた時、前を行く彼女の頬に何かが当たり驚きと共にまた新たな刺激が投入された事を喜んで声を張り上げ、自身の頬を叩いたそれを掴んで検める。

「これって……魚だよね？毒の泥水の中を泳げるつて事は、毒に耐性があるのかな！？それかこの子も毒持ちで自分の毒と沼の毒を中和させて中性にしてるとか！？ふくむ、何はともあれ一回齧つてみよう！」

そう言うと彼女は手にした魚を腹から噛み付いて租借し始めた、ついでにこの時別の場所でフローラと同じ様にモンスターを捕食していたもう一人の初心者プレイヤーが怪物の側に踝の辺りまで浸かり始めたと事は今は置いておこう。

「んぐんぐ……味は、悪くない？毒沼を泳ぐ位だからてつきり不味いのかと思つたけど、毒効果も発動してないしHPも回復してる……なんだろこの魚？」

彼女が口にした魚はデトックスフィッシュと呼ばれる解毒効果の

ある魚型モンスターでこのダンジョン内で毒状態になつた際ここで解毒と回復を行えるセーブスポットとなつていた、なお解毒ポーションはこの魚を素材にしても製作できる為に一部の生産職プレイヤーは定期的に訪れるらしい。

「ふう、ここは特に目新しい刺激は無かつたな……次行こ次。
毒沼を渡り切つたフローラはこの場で肩透かし気味を喰らつた心境でその場を後にした。

その後も出現したモンスターを相手に攻撃を受けては痛みの快楽を振るえ、攻撃が緩めば反撃を返し更なる猛攻を誘い、トラップがあれば自ら進んで発動させギミックによる責め苦に頬を染めて喜んだ。

「ふむ、ここが最奥ボス部屋の前つてところかな？」

目の前にはフローラの身長よりも高く大きい扉、如何にもこの先に強敵が待ち受けている事を想起させるに十分な威容と存在感を示す両開きの門扉が聳え立つていた。

「クロムさんの話だとこの先に厄介なボスが居るつて事だつたけど、どのくらい厄介なのかな？ダンジョンのボス何だしきつとすつごく強くて手強いんだろうな？……よし行こう！すぐ行こう！たつのしみだな！」

固く閉ざされた扉に手をかけ力を込めて押し開くと、薄暗い室内には薄紫色の靄が中を満たし途中にある毒沼より色が濃く巨大な貯水池台の毒池が如何にも何かが潜んでん居る事を伝えていた。

フローラが完全に部屋にの中に入ると勝手に後ろの扉が締まり閉じ込められる、大きな音を立て閉まる門扉に興奮して身震いするフローラ、大方あの戸に挟まられたら痛いのだろうと想像しての事だろう。

「雰囲気あるな、ふふ何処からでもカカツテきなさい！……何ですね。」

そのセリフに反応する様に毒池から巨大な影がせり上がりその全容を見せた。

「アナタが毒竜さん？想像通りの姿ね、とても強そう！」

三つ首を持ち上げた巨体は所々を自身の毒が侵食してそうなつた

のか肉が腐り骨が見えている個所まである、眼球もその幾つかは潰れてしまつたのだろう目が在つた場所には深淵の闇を思わせる影が見えた、一度咆哮すればその口から紫の毒息を吐き散らし、己がこの洞穴の長だと主張せんばかりの存在感と重圧を示していた。

「先ずはどう来る！つてヒヤア～！毒液の濁流があ～！」

相対するフローラに向けてその口を大きく開き独のブレスを浴びせた、この攻撃を体を広げ全身で受け止めた彼女はその勢いに押し流される。

そのまま威力が弱まるまで流されたフローラは全身に猛毒を受ける、幸い装備は無事だつたが毒の状態異常にはかかってしまう。

「驚いたよ流石はボスモンスターの攻撃だね、「完全抗体」もすり抜け毒効果つて事はその辺りも普通じやないつて事か……よし、ブレスは積極的に受けて後は様子を見て受けるか逸らす考え方よう。」

一撃喰らつて相手の実力の一目を体感したフローラは、その一端から相手の能力を分析して攻撃の受け方の方針を決める、そうと決めたら痛みに一直線なフローラは止まりないブレスを受けて押し返されても直ぐに立て直し何度も向かっていく、猛毒の痛みが全身を駆け抜ける度に体の動きは鋭くなり素早くなるHPが減る度にMPが増え攻撃が緩めば反撃してカウンターを喰らう、そんな遣り取りをフローラのHPバーが半分になるまで続けたその時。

【スキル「完全抗体」より毒耐性が「毒無効」に昇華しました。】

「えツッ!!嘘でしょ！このタイミングで！」

毒竜の猛毒のブレスを回避せずに喰らい続けたのだからこうなる事は明白だつたしフローラも予想はしていたが、それでもそれまでにHP値にして三分の一になるまではもつだろうと考えていた。

予想よりも早い毒の無効化に落胆して動くを止めた時、その一瞬を逃すまいと三つ首の内の真ん中の顔がフローラに延び彼女の胴体に噛み付かんとしたその瞬間、フローラの腕に巻かれた腕時計の様に召喚盤が輝き銀龍ククルカンの分身が迫る毒竜の首に噛み付いた。

「へ？ククルカン君？何で、私は呼んでないよ？」

急に現れたククルカンの分身に困惑するフローラだが、そんな彼女

に追撃する様に残る二つの頭も迫り急いで回避すると、彼女が避難したのを確認した分身が彼女の元に近づいてくる。

「ククルカン君？ 何で君が出て来たのかな？……何かな何を伝えようとしてるの？」

フローラの目の高さで浮遊する分身が彼女の質問に答える代わりに体を擦り付ける、まるで何かを伝えようとしない風にも見えた彼女はさらに質問を投げかけて今度は毒が付着している顔を舐められる、それも何度も何度も。

「くすぐったいよ。そつか、心配してくれたんだね……ありがと。」

彼等は召喚盤に記録された其々の時を司る神獣の分身である、だが分身であっても意思は独立し一つの個体としての性質を持つ為、彼らの主の窮地には彼らの意思で顕現する。

「そうだよね、今は戦闘の最中だった、ちゃんと相手に集中しないと失礼だよね……よし、気持ちの切り替え完了だよ！」

自分を助ける為に命じられずとも現れた分身の姿に、さつきまで目先の些事に囚われ動きを止めた自分を恥じ現状の優先順位を眼前の毒竜との戦いにのみ意識を向ける。

「ふつー…………ちいいいチエスト——！」

元々発動していた「ジャイアントキリング大物喰らい」と「勇猛果敢」に加え、今はHP半減の効果で「激昂」と「正拳」の同時に発動した事でAGIが加速度的に上昇、その速力をもつて毒竜の懷まで飛び込むと渾身の一撃をぶつける。

一撃を受けた毒竜はその巨体を数歩下がらせたがそれだけで、攻め切るにはまだSTR的にも足りてない。

「……ダメだね、思つたより手応えを感じない、もつと威力を上げなきや。」

勿論一撃を放つたフローラも拳を通じて感じ取っていた、相手の体が硬く衝撃が内部に届いてないと感触で理解できている。

「威力を上げつつ内側に衝撃を浸透させて、内部で炸裂させるには……うん？ 何かな？ ククルカン君、何か提案？ 召喚盤がどうかしたの？」

フローラと共に毒竜を攻撃していたククルカンが、思案を巡らす彼女の元に近づいて目の前で静止すると視線を送つて何かを伝えようとする、何を伝えようとしているか如何にか読み解こうククルカンの送る視線の先を見ると召喚盤を指している。

「この召喚盤に何が……若しかして！憑依 「辰の刻」ククルカン！」

そう宣言すると体が半透明になりオーラの様な状態になつたククルカンがフローラの体を覆い、ひと際強い輝きを放つとククルカンの姿は消え代わりにククルカンの特徴に似た光のエフェクトを身に纏つたフローラの姿があつた。

「綺麗……これが憑依か、見た目以外に変化は……竜装拳？……成程、いけるね！」

召喚盤の守護獣の召喚ともう一つの機能、憑依とは呼び出した守護獣の分身をオーラとしてその身に纏い能力を得る機能である、そしてククルカンの憑依時の付与能力は「竜装拳」その手に竜の気を纏い相手を透過しながら衝撃を伝える防御透過技だった。

「お待たせ毒竜さん、ここからが本番だよ。」

ド？のフローラが本気の戦いを始める時、それは己の性癖を封じ戦いに徹する時、それ即ちフローラが相手と戦いに決着を着ける時である。

「リベンジソウル」チャージ、「電撃鱗」！

毒竜との対戦の最後は今フローラが打てる最大の一撃を放つと決め、その為の「リベンジソウル」を準備状態で発動すると次いで「電撃鱗」で自らにダメージを与える。

「電撃鱗」！「電撃鱗」！「電撃鱗」！

それも一回では終わらず何度も、フローラがHPを削る度の電気結界は大きさを変えて範囲を拡大させ遂にボスの間の半分を占めるまで巨大になる。

「はあはあはあ……ん！」

自らが発した痛みに身悶えつつも毒竜を晴眼し、一歩一歩ゆつくり体を前に倒しそれ運動して電気の結界も移動し毒竜を圧迫少しづつ後退させ空間の端まで追い詰める。

逃げ場を失った毒竜は尚も前足を上げ電気結界の範囲から逃れようと胴体を持ち上げるが、フローラは更に前進して毒竜の腹部に電気結界を押し付ると、腹に電流が流れた痛みに藻搔く様に叫びをあげる。

「[竜装拳] ……すうううう、「リベンジソウル」バースト！」

「竜装拳」の発動と同時に「リベンジソウル」のチャージを解いて最後の一撃の為にすべてを引き出す、彼女の腕には竜の頭部状のオーラが現れ更に周囲に展開されていた電気結界の電気が集まりだす。

「電撃……竜装……銀龍拳！」

そう言い放ち拳に溜めたエネルギーを毒竜に向けて解き放つ、瞬間彼女の手から放たれた竜の頭部が胴体を得て真っ直ぐ毒竜に迫り貫き通すとその一瞬の間の後、一撃を受けた毒竜は光と消えその後には宝箱が現れる。

「ふう……たのしかつた～！それじゃ、箱の中身は何じやろな～？」

戦いを終えて高めた気を下げ精神を何時もの調子に戻すと、出現した宝箱に歩み寄り中を確かめる。

「これは石？いや目玉だね、毒竜さんの。」

宝箱の中身を見たフローラがそう言うと、宝箱の中から手のひら大の大きさの赤い球体を取り出し詳しい情報を確認する。

【毒竜の眼】

毒竜ヒドラの眼。

杖の素材として使用できるが装飾品としても価値が高い為売却すれば高額で取引できる。

彼女の推察通りこのアイテムは【毒竜の眼】であった、説明には魔法職の武器の素材に出来るとあるが売却しても良いらしい。

「うん、これに扱いについては保留でいいか。」

フローラには現状必要ない物だが追々何かの役に立つかもしれないと思い、ストレージの肥やしにすることを決め帰路へと着いた。

ド？少女とバトルロワイヤル

本日このNWOの世界は晴天なり、されどここに集いしプレイヤー達の心中はこの穏やかなる空模様とは画し大乱の兆しを見せる。

それもその筈、今日は以前より予告されたNWOのサービス開始以来初となる大型イベントの開催日初日なのだ。

形式はバトルロワイヤル、大多数のプレイヤーが順位を競いながら互いの実力をぶつけ合う乱戦である。

『むふふ、みんな殺氣立つてるな／＼きつといっぱい痛い事してくれるんだろうな～』

そんな皆がその目に修羅を宿す中、我らがド？少女フローラは周りとは違う意味での妄想を膨らませ気分を高揚させていた。

「それでは、第一回イベント！バトルロワイヤルを開始します！」

その場に集つたプレイヤーが皆一様に氣の昂ぶりを責声高に響かせ各々の意気込みが仮想現実の空を揺らし、その声に搔き消されぬようルール説明のアナウンスも大音量で流される。

「それでは、もう一度改めてルールを説明します！制限時間は三時間。ステージは新たに作られたイベント専用マップです！倒したプレイヤーの数と倒された回数、それに被ダメージと予ダメージ。この四つの項目からポイントを算出し、順位を出します！さらに上位十位以内のプレイヤーには記念品が贈られます！頑張ってください！」

そのルール説明を最後にフローラを含めた一帯に集まっていたプレイヤー達をイベントフィールドへ送り出した。

→SIDE changes

「はあはあはあ……。」

鬱蒼とした森の中をただ一人片手剣を装備した少女が駆けていた、対戦相手を探してか？否、生き残る活路を得るためだ。

「やつと撒けた……がっ！」

追っ手を振り切り逃げ延びたと安堵の表情を見せた少女の後方から、彼女を射抜かんとする矢が飛んできて肩を貫かれ、その後二人のプレイヤーが後方の林から出て来る。

「やつと、追い詰めた。」

「まったく手間かけさせんなよ。」

獲物に逃げられかけイライラしているのか不機嫌そうに語る二人組は一方が槍を構えもう一方が弓を持つ、彼女を射つたのは弓を持つ方だろう。

『やつぱり、一人で参加するんじやなかつた……何で、喧嘩なんかしちゃつたんだよ私!!』

本来彼女は現実の方で仲良くしている友人數人と今回のイベントに参加する予定だった、しかし前日に些細な事が切つ掛けで仲違いをしてしまい和解も叶わないまま一人で参加する破目になつたのだ。

「時間を掛け過ぎたコイツを殺つたら、早く次のソロの参加者を見つけねえーとな。」

「たつく、早くしねえーとほかの奴と差が開いちまう。」

このイベントの趣旨バトルロワイヤルはプレイヤー同士のバトルが主体だ、だが誰が誰を倒してもポイントは一定であり出来るだけ多く倒した方が上位に入る。

『これで何回死んだ? ソロ参加のプレイヤーが狙われやすいのは知つてたけど、それでもここ迄何度もパーティー参加者に狙われた……もう、嫌だ……早く終わつて!こんなイベント。』

そのルールの性質上、多数対単独の構図が出来上がりやすく又単独での行動はよほど実力者でもない限りカモにされ易いのだ、無論彼女もイベント開始時点から何度もデスを繰り返しリストポーンする度に狙わる事を繰り返していた。

『さつさと殺るぞ、悪く思うなよこれはゲームのイベントなんだっ!』
「もーらい!」

槍を持つ方のプレイヤーが彼女に狙いを定め獲物を突き出そうとした時、彼女の後方の草陰から彼女の前に躍り出た。

「えつり!」

「な、なんだ!!」

「?…?」

純白の装備に身を包み自ら突き出された槍の一突きをその身体で

受け止めた美しい少女の乱入に、その場に居た三人は一瞬思考が止まる。

「ふふふ、ギリギリセーフ……もう少しで痛みを感じる瞬間を逃すところだつたよ。」

純白の少女が何やら小声で呟いたがその場の緊張が、それを聞き取るの耳を遠ざけた。

「な、ナニモンだよお前!!コイツの仲間か!!」

「クッソ、誘われた!!誘導されたのかよ俺達!!」

絶妙なタイミングで現れた純白の少女を前に思考能力が戻り始めた二人組だが、状況を正確に見定めるには情報が少なすぎ困惑と焦りのセリフが溢れた。

「あの……ありがとうございます。」

「んふふふ♪つえ?……ああ! 気にしないで、私がやりたくてやった事だから。」

戸惑う二人を脇に置かれ窮地を救われたと感じた少女は純白の少女に向け礼を言う、上機嫌に笑みを浮かべていた純白の少女は突然言われた例に不思議そうな顔をして一瞬考え真意に思い至ると何でもない様に返して見せる。

「……おい、あいつら仲間じゃないみたいだぞ。」

「ああ正義感の強いお嬢さんだな、隠れてやり過ごせばいいものを態々出張つて俺達のポイントになりに来てるんだ。」

少女たちの話し合いの様子を見ていた二人組が状況の詳しい経緯を知り一転して優位に立てたと感じていた、そして弓使いの方が矢を構え純白の少女に向けて弓を引き始める。

「あつ! 危ない!」

「大丈夫……。」

安心して油断していた少女が純白の少女の方に狙いを定めた弓使いの行動に気が付きカバーに入ろうとすると、純白の少女はそれを手で制し正面を向き両腕を広げ笑みを浮かべて前に進み始めた。

「つ!!何のつもりだ、射られることが分かつていてノーガードつて!!」
「は、ハツタリだろ!!さつさとやれよ、どうせ相手は籠手使いだ近づか

れる前に落とせばいい！」

純白の少女の謎の行動に気圧され一瞬攻撃の手を止める弓使いに、不気味に感じながらそれでも強気の姿勢を保ち攻撃を喰ける槍使い。

「うつ……はあはあはあ、んつ！」

純白の少女の謎のプレッシャーに精神的な劣勢に立たされた弓使い、その恐怖から指が震え弓を離れた矢が僅かに逸れて彼女の右の腕の付け根に当たる。

「ぐつ……ふふふ、惜しい惜しい後もうちよつと。」

「な！バカにしやがつて！そんなに殺れたいなら殺つてやる！」

屋が当たった瞬間僅かに顔を変えたが直ぐに微笑みを浮かべ意味深に呟く、それを聞き狙いが外れ急所が逸れた事を挑発されたと感じた弓使いは今度は感情のまま口クに狙いも付けずに矢を撃ち始めた。「ふふ、ふふふ……いい調子いい調子、このままもーっと撃ち続けて。」「くつ、コイツ……ふうふうふう！」

相当数射られているにも関わらず笑みを浮かべたまま歩みを止めない純白の少女、そんな彼女の行動が弓使いの激情に更なる勢いを与える矢をつがえる手が更に早くなる。

「おつおい、一旦落ち着けよ何か可笑しいぞお前？」

「うるせえ！殺してやる、あいつをここで！」

ヒートアップした弓使いの攻撃を一旦止めさせようと槍使いが説得するが、何かに追い詰めら始めた弓使いは聞き入れず更に攻勢を激しくする。

「くふ、くふふふ……楽しいね、でももつと楽しませてよ。」

「ああ！クツソ、嘗めやがつてこれで落ちろ！「バーストショット」！」

焦る弓使いの攻撃がいつそうの激しさを見せ純白の少女は愉快そうに笑い更なる挑発めいた言葉をかけ、遂に怒りが頂点に達した弓使いが止めとするべく純白の少女に彼が持つ中で必殺のスキルを発動させる。

「大技があ……ふふ、いいよいよそう言うのが欲しかったんだつ！」何処までも愉快そうに笑う純白の少女、彼女にスキルの宿つた矢が辺り爆発する。

「おい！ホントに如何したんだよ、そんな大技ここで使うなんて！」あれは、もつとプレイヤーが数が多い時の為の取つて置きだろ！」

「うつうるせえ、あれだけ矢を撃つても倒せなかつたんだ……もう、あのスキルを使う以外に選択肢なんてねえだろ！」

弓使いが取つて置きのスキルを勝手に使かつた事に意見する槍使いだが、普通のプレイヤーならとつくに落ちていても可笑しくない数の矢を受けても引くどころか前進を続け倒れる兆しさえ見せなかつた純白の少女

を思い出しながら抗議の声を一蹴する。

「それは！それもそうだけどよ……。」

「それより、本当にアイツが死んだか見てこつ！」

「あははは！」

仲間の意見にも同意したいがそれでも納得がいかない様子の槍使い、それを脇に置いて生死の確認をさせに行かせようとした時大声で笑うさつきまで聞いていた純白の少女の声が木霊した。

「嘘だろ……！」

「あれを喰らつてまだ動けるなんて……つく！」

槍使いは絶望で顔が引きつり、弓使いは一瞬思考が止まりかけそれでも反撃に備えて弓を持ち直す。

「あは、あはは！今の凄かつたね、当たつた個所で爆発してさ！ねえ、ああいうのもつと頂戴！もつと、も一つと激しい奴とかジワジワ来る奴でもいいよ！もつと遊ぼ！」

「ひつ！」

「こいつ！今まで全部受け止めてたのは遊びで、反撃しなかつたのは本気じやなかつただけってか…ふざけんな！」

無邪気な子供の様に燥ぐ純白の少女の様子を、槍使いは怯えて萎縮し弓使いは苛立ちを再度募らせる。

「ん～？中々攻撃してこないなあ～？」

一人からの更なる追撃を持ち望んでいた純白の少女が、なかなか攻勢に出てこない二人の様子を不思議そうに見つめ。

「あつ！そつか反撃して欲しいんだね！ごめんごめん、ついうつかり

こつちから攻める事を忘れていたよ。」

「おい！来るぞ接近戦はお前の役目だろ！」

「来ないでくれ！来るなあー！」

純粹な視線でそう呴きながら前傾姿勢を取り一機に駆け寄り速度はそこまでないが距離を詰める、弓と槍で遠距離と近距離の攻撃手段を別けていた二人組は近接戦担当の槍使いに弓使いが檄を飛ばすが、腰を折られた槍使いは怯え切り槍を構えはするが後退りして前に出ようとはしない。

「クソ！近づかれる前に落とし切れるか？」

仲間の不甲斐なさに苛立ちつつ冷静に迎撃を始める弓使い、その弓使いが放った矢を純白の少女は籠手を使い弾き落とし尚も前進する勢いは落とさない。

「お待たせ！」

「つ！ここ迄かよ……負けたぜ。」

そして純白の少女は弓使いに完全に組み付き反撃を受ける、籠手使いの初期のオートスキル「ジャストガード」で防いだダメージは「ジャストカウンター」のダメージに上乗せされる、つまりここ迄自分がしていた攻撃が全て自分に帰つて来ると言うこと、嘗て自分も一度は選択したこの初期装備だからこそその特性はよく知っている、今まで全攻撃分のダメージが上乗せされた一撃を受け弓使いは敗北した。

「あれ？もしかして、倒しちゃつた？……まあいつか、もう一人いた筈だし。」

弓使いを倒してしまい残念そうにしていた純白の少女、それでも落胆しても後には引き摺らず残つた槍使いに視線をよこす。

「ひい！み、見逃してください！お願ひします！」

そこには最初の方の威勢の良さが嘘のように萎縮しきり恐怖に怯える槍使いが居た。

「……はあ、彼もかあく戦意の無い人とは戦いたくないんだよなあ！でもこのまま、見逃してあげてもきっと直ぐ遣られちゃうだろうしそうだ！」

純白の少女には戦いにおいて強いこだわりがあり、目の前で縮こ

まつた槍使いは彼女にとつて相手をしたい手合いではない。

しかしここで中途半端に見逃しても他のプレイヤーの餌食になるだけでの間は恐怖を感じ続ける事になる、それを感じさせる位ならここで止めを刺して楽にしてやつた方が彼の為とも言えた。

さてどうしたものかと思案に更ける純白の少女、そして妙案が思い付いたのかここ迄ずっと蚊帳の外だつた片手剣の少女を手招きで呼び寄せる。

「何か用ですか？」

一部始終を見ていた片手剣の少女は頭に疑問符を幾つも浮かべながら、純白の少女の下に歩み寄る。

「ねえ貴女、最初この人たちに追いかけられてたよね？」

「えつ？ は、はいそうですけど……。」

呼び寄せられたと思つたら唐突にそう尋ねられ、少し戸惑いながら質問の内容を肯定する。

「じゃあ、リベンジしたくない？」

「え？ リベンジですか？ ……したい、です。」

純白の少女から提案に片手剣の少女は戸惑い、それでも怯えさせられ追い掛け回された悔しさが蘇り純白の少女からの持ち掛けに応じる。

「うん分かつた……っと言う訳で、そこのえーと誰さんだつけ？」

「ハング……です。」

片手剣の少女との話が纏まり彼女のとの会話を一旦切ると、縮こまつていた槍使いもといハングと名乗ったプレイヤーに向き直る。
「ハングさんね……見逃して欲しいって話だつたけ？ いいよ、この子と一対一で戦つて勝てたらそのまま見逃してあげる。」

「ほ、本当ですか！」

純白の少女から自分の命乞いに対する回答、それに生き残れる光明を見出し喜ぶハング。

「本当だよ。勿論戦つてる間、私からは手出ししないし他のプレイヤーが来ても手出しさせない、決着が付くまで見張つておいてあげる。」

「ありがとうございます！」

純白の少女は自身の発言が嘘ではないと続け、片手剣の少女はそんな彼女の心意気を素直に礼を述べる。

「は……は……はあーははは！やつた……やつたぞ！助かつた俺まだ生き残れる！」

「つ！」

しかしそんな時でも、ハングは自身の勝利を疑っていないのか、相手の実力を過少に見ているのか、そんなセリフを吐き片手剣の少女に睨まれる。

「それはどうだろうね？……それじゃ二人とも向き合つて。」

純白の少女に呼びかけられ己の勝ちを確信して卑下た笑みを浮かべるハング、相手を睨みつけ怒りに燃える片手剣の少女、両者の視線がぶつかり見えない火花が散る。

「二人とも覚悟はいい？勝つても負けても恨みつこなしだよ？」

「はい！」

「クク、いつでも。」

二人が相対し準備が整うと改めて両者に覚悟を問い合わせ、両者各自の返答を返す。

「そつか、それでは始め！」

「はあー！」

「ラツシユスピアー」！

純白の少女の開始の号令と共に、片手剣の少女は一気に駆け出し距離を詰め、ハングは初手からスキルを使い素早く連続で槍を突き出す。

「くつ！それでも、止まるか――！」

「ナニ！」

繰り出される槍の一突き一突きを最初の動きで受け流し躊躇切れない攻撃は敢えて急所を逸らして受け止める。

「これで！」

「あ、ありえねえ！俺が、こんな……！」

一息の間を抜いて眼前に迫った片手剣の少女その目はハングを射

程圈に捉えていた、そしてこの状況を飲み込めないハングは防御の方前も取れず固まる呑み。

「マツハスラツシユ」！

「こんなところでえーーーーーーーー！」

通り抜けざまに切り抜いた少女の剣がハングの首筋を裂いた時、ハングの断末魔の叫びが虚しく響く。

「ハア…ハア…ハア…やつた、やつたー！」

片手剣の少女は己が勝った事に歓喜の声を上げる、ここまで恐怖など微塵も感じずただ心地の良い達成感で心が一杯になる。

「決着ついたね。じゃ、私もう行くね「ミストイリュージョン」。」

「えつ!!まつ！」

一人溢れ出す喜びに沸き立つて居ると、この状況を作つてくれた当事者である純白の少女が勝敗が付いた事で自分の役目は終わつたと言ふようにその場を立ち去り、後を追いかげようとすると急に霧が立ち込め姿を追えなくなる。

「つてください……行っちゃつた。」

唐突に現れた純白の少女、彼女の背を思い出し何か胸にこみあげて来るモノを感じていると背後から複数人の声が聞こえて来た。

「今こっちで霧が発生しなかつた!!」

「間違いにあの人居たんだ！」

「早く探そー！まだ近くにいるかも!!あつ！貴女ここで全身白い装備をした女の子を見なかつた？」

林をかき分け現れた三人のプレイヤー、その内の一人がこちらに気が付き声を掛けて来る。

「全身白い装備！居た！居ましたさつきまで、私その人に助けられてそれで……。」

現れた三人があの純白の少女を探しているそう思った時、二つの可能性が後間に浮かぶ一つは少女にやられ付け狙うプレイヤーもう一つは……。

「貴女も!!それじやあ一緒に探しよ！絶対一緒にパーティー組んでもらうんだから！それでどっちの方に進んだ？」

「えつと……あっち！」

自分と同じように彼女に助けられ仲間にして欲しいと思ったプレイヤーそしてこの三人はそのタイプだった、そうと分かれば迷う必要など無い自分もこの人たちの輪に加わろう考えるまでもなく彼女が消えた方向を指さし急遽できた仲間たちと純白の少女の背を追い出した。

純白の少女フローラ、彼女の起こした行いはこのイベントの中でも小さくない影響を見せ始めた、それはイベントの外側でも。

↳ side change ↳

【NWO】第一回イベント観戦席3

241名前：名無しの観戦者

やつぱ優勝はペインか？

ゼーノが参加しないって話ホントだつたんだな

ゲーム内最高レベルの二人の内の一人だし無双してんな

242名前：名無しの観戦者

あれはやばい

動きが人間やめてるW

てかマジでゼーノの姿がどこにも居ねW

243名前：名無しの観戦者

でもやつぱ順当に勝ちを重ねてるのはよく聞く名前ばつかだな
ここにゼーノの名前がないのが違和感あるからやつぱ不参加だろ

244名前：名無しの観戦者

トッププレイヤーが強いのはそりや当然よ

ここにゼーノがいたら違つたかもだけど

245名前：名無しの観戦者は？

何こいつ……やばくね？

246名前：名無しの観戦者

うつわ映つてる奴ら強つ

247名前：名無しの観戦者

暫定成績ランキング

メイプルっていう大盾

百二十人潰して被ダメなんとゼロ

248名前：名無しの観戦者
ふあつ！

249名前：名無しの観戦者
チート？ いや……無いか

250名前：名無しの観戦者
つて言うかそんだけ暴れてたらそろそろスクリーンに映るんじや
ね

251名前：名無しの観戦者
こいつか？ 今映つてる

252名前：名無しの観戦者
盾がW 剣食つてるW

何これW

253名前：名無しの観戦者
可愛い顔してやることがえぐすぎんよー

状態異常とある大盾で殆ど無抵抗のまま潰してる

254名前：名無しの観戦者
でも動き遅くね？

さつきからカウンターばっかり

255名前：名無しの観戦者

確かにあの立ち回りならダメージ貰つて普通だよな
ほら言つてるそばから……は？

256名前：名無しの観戦者
は？

257名前：名無しの観戦者
は？

258名前：名無しの観戦者
あいつ何振り下ろされた大剣頭で弾き返してんの？

259名前：名無しの観戦者

え？ 真面目な話そんなことできんの？

260名前：名無しの観戦者

出来たら皆やるわ

261名前：名無しの観戦者

大盾よりも状態異常よりも本体の方が謎すぎてやばい件について

262名前：名無しの観戦者

おい何かスクリーンに映つてないところで面白い事が起きてるぞ

263名前：名無しの観戦者

なんだよ 今それどころじゃ

264名前：名無しの観戦者

ソロでイベントに参加してるプレイヤー助けて回ってる奴がいるらしいんだ

265名前：名無しの観戦者

え？ 何それ詳しく

266名前：名無しの観戦者

イベントに参加中のフレンドの話なんだけど
パーティーで参加してるプレイヤーがソロ参加のプレイヤーを囲んでいるとそのプレイヤーを庇う全身白い装備のプレイヤーがいるんだと

267名前：名無しの観戦者

全身白い装備？ ってかそれやつて何の意味が？ 今回バトルロワイヤルだろ？

268名前：名無しの観戦者

その筈だよな？ ソロプレイヤーを守てもポイント的にうまみは無い筈だし

269名前：名無しの観戦者

もしかして今回のイベントの参加目的が他と違ったとかか？

270名前：名無しの観戦者

ありえる……のかそれ？

271名前：名無しの観戦者

いやわからんけど？ まつそういう奴がいるって事で

ド？少女の辿った道の上の奇跡

フローラは浮かれていた、この戦場にこの狂乱の場に時に痛みを奪いそして己の悦として、そして挑む者には全靈を持つて受け止め返す。

向けられる敵意は棘は彼女の精神を突き刺し喜びに奮わせた。怯えた者は敵に在らず、戦わずとも敗れたも同じ。畏怖のみの感情は向けられるだけで戦意を失せさせるだけ。

なれども、放つておけば悪戯に恐怖を搔き立て弱者を襲う暴徒となるだけ、だからこそ近くにいたプレイヤーに処理を任せ自分は新たな享樂を求め足取り軽く修羅を渡る。

ここは宴の場、人の欲・鬪志・殺氣蔓延る狂乱の輪達、フローラにとつての生水の源。

「はあゝ、楽しい！氣持ちいい！うつれしい！」

水を得た魚の様に戦渦交わるフィールドを満面の笑みで駆ける、目の前に迫る火球氷塊体に受けて逆り穿つ電光氣にも留めず、少女は進むよ何処までも！

「くそ！止まんねえ！」

「どうなつてんのよ！」さつきから結構な頻度で打ち込んでるんだけど

「いいから打ち続けて！何でか分かんないけど、狙いややすい位置に移動しながら近づいてきてるからきっと倒せるから！」

フローラの向かい魔法使い三人組はMPの許す限り有りつ丈の魔法を放ち、それ喜々として受け止めるフローラは何処までも幸せそうである。

「……さつきから何発当てた？」

「50発超えてから数えてない、つてか数えたくない。」

「普通ならとっくに倒れてる筈なんだけど……。」

そんなやり取りを繰り返し何度もMP切れ、MP自動回復スキルを持つ三人は一人が控え一人が攻撃一人が回復のルーテインを組んで順調にポイント稼いでいた所フローラと鉢合させ、彼女の遊び

相手（一方的）になつていた。

「埒が明かない、ここはリスクが大きいけど大技を仕掛けよう。」「それつきやねえ、か。」

「じゃあ、次の交代のタイミングで仕掛けるつて事でOK？」

そのやり取りがあつたとは知らないフローラだが、攻め方の変化から何かを感じ取っていた。

「攻め方が変わった？ 何かを狙つてる、何を……あつ！ そつか、大技を仕掛けようとしてるのか！ うふふ、いいよ受けて立つよー！ ドンドン来い！」

感に鋭く狙いに聴い、多くの試合を経験し幾度となく熱戦・激戦を繰り広げたフローラの勝負勘が相手の策、大勝負の前の溜めの一時の静寂を感じ取つた。

「つ！ 態々遮蔽物の無い開けた場所に出て、立ち止まつた？」

「何考えてんだ相手さん？」

「……ずっと気になつてたんだ、何でこつちの魔法が全部当たつてたのか。」

フローラの謎の行動に特大の疑問符を浮かべた二人は困惑する、とは言つても彼女はただこれから味わえる極上の刺激を最大限味わう為に出た来ただけだが、その様子を見ていた大技を準備している魔法使いが徐に語り出す。

「まさか、わざと食い続けていたつて言うの？」

「……じゃなかつたら、一撃か二撃は外れてもよかつた、寧ろ態と外した攻撃も当たつてところ見ると向こうから当たりに来てる。」

「避けるまでもないつて事かよ……ふざけやがつて！」

フローラはどんな痛みも零れ落としたくない一心で全てうけに行つただけ、しかしそれを知らない三人からすれば自分達の攻めは避けるまでもなく幾らくらつても痛痒感じないと言われている様だった、故に怒りを覚えた嘗められたままではいられない。

「準備できたよ、詠唱もMPも……タイミングは何時？」

「あと少し、さつきから微動だにしてないわ……腹が立つぐらいね。」

「噛ましてやれよ！ 僕達の最大威力の一撃だぜ、きつと倒せる！」

感情が荒振り目の前でふんぞり返るあの少女の目に物見せてやると息巻く、その敵意は遠くからでもビシビシと突き刺しフローラは喜悦はより強くなる。

「来るね次だ……『リベンジソウル』チャージ！」

この一撃は大きい、為の時間の長さがそれを物語る、どころこそ引かないいや引けない挑む者には対等に自分の性癖を除いてもこの気質は歪めない！

「やつぱりいいな、この肌を突き刺す視線と気迫……この感覚だけは忘れられない！」

懐かしい敵意を向けられた時の身の毛が総毛立つ程の興奮、鍛錬は痛みと苦しみがあればあるだけ強くなれるが相手が居なければ張り合いかない、相手が自身に向ける敵意にはプラスの感情もマイナスの感情も両方備わっていた怒り嘲り緊張興奮そして僅かな恐怖と喜び、挑む相手と挑まれる自分又は挑む自分と挑まれる相手両者の間に流れるその空気が好きだつた、だからこそ被虐に目覚めたソレも重度のマゾヒズムに。

「はあはあはあ……滾る……溢れる……奮い立つ！」

本能を？き出しにし、理性も高揚させ、魂から叫び、今この時こそが絶頂前フローラの命の逆りを堰き止めそれでも漏れ出る興奮の熱気が呼吸を荒くする。

「我が赫焰は神よりの怒り、延焼せよ爆裂せよ焦滅せよ……『メギド・バースト』！」

その手から放たれたのは最初は小さな火球だつた、だがその大きさは膨張し続け遠く離れてもその熱気は周囲の環境を焼いきながらフローラに迫る。

「ん～！熱い！痛い！息苦しい！だから良い！」

彼女の周囲は地獄の景色に様を変え、地面は焦がれて草木は既に消し炭と化し水は蒸発しきつて跡も残らない、それでも彼女は立つていた一步も動かず跪かず堂々と迫る太陽の如き火焰球を笑みを浮かべて待ち構え極光と炎熱の渦に？み込まれていった。

「行つた！」

「ははは、ザマーミろ！俺達を侮つていた罰だ！」

「……あの人、何で逃げなかつた!?」

控えに回り終始の様子を見ていた二人は自分達の勝利を確信して大いに喜ぶ、はしゃぐ二人とは対照に不気味さと驚愕した様子で炎々と燃え爆ぜる火焰地獄を注視し続ける攻撃主。

「何でつて、そりやビビツて逃げる事も出来なかつたんじや……？」「そんなんじやない！当たる直前まで見せていたあの表情にはそんな……。」

「そんな……何かの間違이じや？」

普段冷静な仲間が珍しく焦つている、その様子に浮かれていた二人も漠然とだが不安が過ぎ、そして三人で爆発地点を注視していると、火の中でゆつくりと動く人影を見る。

「…………つー嘘…………でしょ？」

「そんな…………こんな事つて、アリかよ…………？」

「やつぱり…………倒せてない！」

熱波と火炎が空まで赤く染める直地点の中心、火炎とそれで発生した火傷のダメージのエフェクトを身体の其処彼処に見受けるが、本人の表情は健常むしろ余裕の笑みすら浮かべて地獄の景色を観覧でもするかのように足取り確かに当たりを歩き回る。

「…………なんだよアレ？」

「あそこまで喰らつて反撃も接近もしてこないなんて…………嘗めてるとかそんな次元じやない、相手にもされてないんだ私達！」

「…………。」

信じられない信じたくないこの光景はまやかしだ、自分たちの相手への恐怖が見せる虚像だと精神が理解を拒み消えてくれと願うが、その思いは虚しく時間が経てば経つただけそれが紛れもない現実で真実と突きつけられる。

「何て…………なんて奴だよ…………はは、ハハハハハ！」

「つーいきなり如何したのよ！こんな時に笑いうなんて！」

ダメージは受けているだが倒れない相手を前に濃厚な絶望感、攻め手はこちらだが追い詰められたのも此方、相手はただこちら攻撃を受

け続けたのみ逃げも隠れも避けもせずただ受け続けるそれだけの事、だがそれが恐ろしい攻撃リーチの差など宛てにならない相手は反撃してこないのだから、自分達では倒せない圧倒的な強者を相手にした事に気が付いた時、熱血なプレイヤーの仲間が狂った様に笑い出し勝気なプレイヤーが咎めるがそれでも笑い声は収まらない。

「もういいよ、信じられないのは僕も同じだ……。」

「ハハハハハ！……こんな笑いしかないだろ、これはバトロワだ上位プレイヤーだつてわんさか参加してるのも分かつてた、でもプレイヤーだからこうやつて山張つてたら行けるだろうつて考えてたら……本物に当たつちまつた……煮ても焼いても食える気がしねえバケモノ、並の奴には手に負えねえ本物の怪物……ああ、こんな事ならもつとレベル上げ頑張つてりやよかつたよ、スキルとかも研究してさ……。」

「アンタ達……まだ、負けてないじやない！」

火焰地獄の中を舞う純白の妖蝶の幻想さながらの光景、その妖艶さと奇怪さを併せ持つた觀望を前に何もかもを諦め戦わずして敗北を認めようとしていた時、感嘆に暮れる二人を叱咤する勝気なプレイヤーの声が顔を上げさせる。

「そうよ、相手は強いわ！強過ぎるわよ！こつちが一方的に攻めても落とせる気がしない位分厚くて大きいわよ！でもね、それで諦める事したくないの！相手が反撃してこないなら、反撃させるまでは粘りたいじやない！じやないと、私は悔しくてたまらないよ！」

「……そうだな、アソツは今も本気じやない……どうせ負けるなら、アソツを本気でさせた上で負けてやる！」

「いやいつそ勝とう、最初僕達は彼女を侮っていたでも本当に侮らっていた僕達で、きっと彼女は一人でも戦えるだから群れてる僕らは相手にならないって考えているのかも知れないし、実際に僕らが遊ばれていた……ここから僕らが挑むんだ圧倒的強者に！」

数を揃えれば勝てるとは弱者の考え方とはよく言われる事だ、強者はその強さ故に孤独なるともよく言われる、実際どうだかは知らないがこの場の構図はそれを表していた。どんな攻撃も受け止めきり尚

も立ち続けるフローラと、どれだけ攻めても倒れないフローラを一方的に恐れる三人。その両陣営の心境は異次元とも呼べるほど離れている。

「はあはあはあ、ここすつゞく気持ちいい！火傷つてこんな痛みなんだ！熱くてジンジンきて……最高！」

対岸はシリアルス此方はコミカル、両者の温度差で風邪でもひきそくなほどである。

「ふんふんふんふん！もうちょっとここに居ようかなー？でもいい加減動かない、あっちも攻撃してくれないし……つ！何この感じ……悪寒？まさか、相手の心折れてないよね？……ううん、そんな感じじじゃないね、もつと危ない！」

最高の環境の中で次の行動をどうするか決めかねていた時、フローラは不自然な悪寒を感じ取りそれが何なのか思考する、相手が折れた時も悪寒は感じるが今回はそんな物の比ではないただ落胆するだけの悪寒とは違う毛が逆立つ感覚、例えるなら大きな災害の予兆を感じ取った野生動物の様なそんな感覚、それが彼女を走らせたこのままでは相手が危ないと。

「召喚「巳の刻」ナーガ！」

普通に走るよりも分身獣に乗せて貰つた方が早い、一秒でも早く彼らの下に向かわなくては折角の対戦相手なのだ何が迫つてるか分からぬが良からぬものであると事は分かる、何故ならフローラの危機感がさつきからずつと警鐘を鳴らし続けているのだから。

「何だと急に、なんか相手さんが本気になつたぽいぞ？それも、見た事ないモンスターに乗つてるし。」

「あら本当、何でかしら？まあでも、やつと本気で相手をしてくれる気になつたのかしらね。」

「そうだと良いけど……あんなに焦つてるのは不自然じゃないかな？」

フローラの焦燥は遠見からでも察せるほど表れている、フローラ本人もこのイベント中化身の召喚は行わずに楽しむつもりでいた、だが自決を一時的に捨ててでも対処しなければと思う程の事がこのイベ

ントで起きていると肌で感じ取っていたのだ。

「さつきより近付いてきてる、あの三人に後ろから……強く！」

それは悪意を感じない全く意識もしてない無邪気さの塊、例えるなら小さな子供が時折見せる無垢なる残虐性、好奇心と言う物の裏に隠れた本能的な暴力、フローラがもつとも危険とし畏怖よりも苦手する手合いの類であり、理性を失った時の望まぬ孤立を得てしまつた自身でもる。

「何にしても、向こうから近づいてきてくれるなら寧ろこつちには好都合じゃない。」

「そうだ、今まで距離を取られてたせいで遠距離でも届く低威力か準備に時間がかかる系の魔法しか出来なかつたが、距離さえ縮まれば短時間のチャージで高威力の魔法も撃てる、勝負するなら今だろ！」「でも……。」

今までの余裕あるやり過ごし方を捨てて迄接近してくる意図を掴めない、あのまま彼女に攻撃を続けても体力を削り切る目測も経たなかつただろうし、何より攻撃してもポイントにならないのだからこつちが根負けして別のプレイヤーに狙いを切り替えていた筈で、結果としてはお互いポイントにもならない無駄な戦いを続けていた事になるが、成果に現れない主に精神面での敗北は喫していた。

「ポイントが欲しくなつた？ならもつと早い内から、接近していくも可笑しくない筈……何が目的なんだ？」

「それ言つたらもつと前からでしょ？読み切れない相手なのは、最初からそうちだつた。」

「相手の出方が変わつたからつて警戒ばかりもしてられないだろ、ずっとコツチの攻勢ばかりだつたのがアツチからも仕掛けて来ただけだ、これまでの累積ダメージもある火傷も負つての今以上のチャンスはないだろ？」

未だにフローラの動向の変化を勘ぐり眉間に皺寄せて思案を続ける冷静なプレイヤーに、残る一人はこの好機を逃がしたくないが為に慎重になる冷静なプレイヤーを説得する。

「……分かつたよ、このままウジウジ悩んでても埒が明かないしね。」

「そう来なくちゃ！」

「よつしや！ ガンガン行くぜ！」

難しく考える事を止めた晴れやかな顔でフローラと相対する三人、その闘気は急ぎ向かうフローラも感じ取る。

「良かつた心は折れてない、でも今はそこから離れて欲しかつたかな？」

今だに続く警鐘の音の幻聴が距離を縮める毎に強く激しくくつきりと聞こえてくる、最早氣のせいではなく確実の近付いてきているのだと本能が煩いほど知らせて来る。

「攻撃を再開してくるか、「バイアップチャレンジ」仕方ない最後まで相手してあげますか？」

急いでいる時でも相手が攻めの姿勢を見せれば受け止める、彼女はド？ 意思の在る攻撃から逃げる事は絶対ない、全て受け止め美味しく喰らつて喜びで満たす。

とはいえ今はこのいい様なのない不安感を如何にかしたい、だから今度はダメージを受けるよりも力を溜める事にシフトする。

「むつ！ ガントレットで受けた？」

「どうやら、本気で相手してくれるらしいな。」

「あの大技からよね？ って事は、アレがきつかけで本気スイツチが入った？」

向かい合う三人も受け身一片から急な防御姿勢の変化に戸惑うがやつと臨戦態勢に移行したと考えた、だからついさつき迄と違い迷わず攻撃を続行する。

「それでも、攻撃は避けずか……ここ迄くるとアレが彼女の戦闘スタイルなんだね。」

「ええ、今なら分かる……彼女は最初から誠意的だったのね、だからこっちの攻撃を受け止め続けた。」

「敬意を払うぜ、アンタみたいな強敵とかち合つた事にさ！」

「ここに来てフローラの戦い方をズレた形で認識してきた三人は、一手一手が直接的な攻撃に変わつていく振りや釣り等ではない明確にフローラを倒す目的の攻撃を。」

「攻撃が一直線に成つてゐる？ありがたいな、態と逸らされたりすると拾いに行くのとか大変だから、まあでも焦らされるのも嫌じゃなかつたけど。」

両陣の一方的な拳を交えた対話が間が埋まれば埋まるだけ激しくなる、三人に危機が押し寄せる前に近付いたいフローラと近付かれる前に落としたい三人、意図は違えど両者の間には邪念など無かつた。「良し来た！この間合いなら私の最大火力が撃てる！」

「おう！かましてやれ！」

「MPの回復は終わつた、援護するよ。」

フローラが元の位置からちようど中間に差し掛かつた時、勝氣なプレイヤーが大技の準備を始め今度は残る二人が時間を稼ぐ。「また来る、でもさつきのとは違う……いいわ、どんな時でも挑む者は誠実に！」

制限時間が迫る中でも来るもの拒まぬフローラは再び受けの体制を取り始め、勝氣なプレイヤーとの対話が始める。

「受け取つて貰おうじやない！我が蒼氷は絶対なり「アブソリュートグレイシア」！」

勝氣なプレイヤーの杖の先から青白い光が現れそこから極寒の風が吹き荒れ、射線上を青く凍てつかせ封じ込む。

「ん！今度は、寒い！風が痛い！雹が冷たい！暑さの後の寒さ……悪くない、寧ろ良い！」

吹雪く雹は鋭利な刃となつてフローラに刺さり、当たつた場所から凍傷になつていく。

「はあはあはあ……ごめんねナーガ君、私に付き合わせて。」

フローラを乗せて移動を続けるナーガにも氷のダメージが入り苦しそう巨体を震わせる、だが進む事を止めたりはしないナーガを労わる。

「憑依「巳の刻」ナーガ！これでHPは共有された、後は召喚「辰の刻」ククルカン！ここからはお願ひねククルカン君。」

分身憑依を使用すると分身体のHPは召喚主であるフローラに依存する、そしてフローラのHPは現在ゲーム内でも五指に入る域に達し

ており例えゲーム内に於ける直接攻撃の最大ダメージでも落とせない、ある意味無敵状態と成っているのである、その分移動速度は落ちるが即座にククルカンを呼び出し腕を伸ばして掴まり宙吊りで三人の下に向かう。

「くうううう！ 宙吊りだと寒さが際立つね！ 手が悴んで辛いのも良い！」

どんの時でもどんな場合でもそれが例え鬼気迫った状況でも彼女の思考は被虐に湧き満たす、被虐は逆境にこそ色湧き立ち心躍る環境が厳しきれ厳しい程活発になれるのだ。

「おいおい、蛇と合体したと思つたら今度は龍呼び出して掴まり飛びしてるぞ……。」

「私達のこのゲーム^N_W^Oでの常識が揺らぎそうだわ……。」

「僕はもう既に揺らいでいるよ、あの非常識なタフさを目の当たりすれば嫌でもね……。」

今回のイベント中いやこれ迄のプレイ時間を総合してもここまで驚かされた相手は居なかつただろう、明らかに異質で鮮明な存在なまじ容姿も優れてるだけに電子の世界の筈なのに神秘性すら覚え、これまでの固定意識が霞んで消えていきかける。

「ま、まあ……これはこれで、俺の最大の見せ場が来たとのかもだけどな。」

「ああ、アンタの最大技つて命中率が低かつたんだけ？」

「威力が高い割に命中率上昇効果がないと結構な割合で外れるって言つてたね……。」

この三人のスキル構成は極振りステータスほどでは無いにしても大きく偏っている、冷静なプレイヤーは時間は懸かるがその分射程と威力命中率が良い、勝気なプレイヤーは時間は労せず威力とほぼ必中には近い命中率もあるがその代わり攻撃範囲が狭い、熱血なプレイヤーは範囲・威力・時間の三点は申し分ないが命中率が低いギャンブラー気質である。

「動かない相手なら当てられんだけど、早い奴だとほほほほ外れるし遠くてもさ……だから、飛んでて基本動けない上に間合いも近い今が

一番当てやすいんだ。」

「そうなのね……もう私達は勝負着いやつてるし、あとはアンタで落とせるかどうかよ。」

「今ある最高打点で行つてもダメだつたからね、ここ迄くると君でもダメかもだけど……。」

三人が三人同じ方向に目を遣る、猛吹雪の中を強がりじやない本当に余裕のある笑顔で龍に掴まり宙吊りになり進行してくる少女がやけに眩しく見える、実際ククルカンが微弱ながら放電して雪や雹を遣り過ごしているから光つているのだがそんなことは今は関係ない。

「んじゃ！ 好機は逃すなつて事で、雷霆來たれり我が運を試す「八卦雷招」！」

吹雪が止んで現れた黒雲がその隙間より電光を覗かせる、今にも打ち下ろして来そうな空模様を浮かべる頭上の様子をフローラは緊張と期待の眼差しで見つめる。

「今度はタイムラグ無し、どこに来るか分からないタイプ……でも、外さないよキツチリ貰つてあげる。」

蟻局巻く大蛇の様な電光の塊が黒雲の中を這いずり狙い定める様にフローラの真上に留まる。

「きたきた！ ふふふ、さあ降りておいでお姉さんが受けてめてあげましよう！」

その言葉に従つた様に猛々しい爆音と閃光を伴つた稲光がフローラを撃ち穿つ、遠目からでも直視にきつくその場に天へと続く柱が立つたような光景。

「すぐつ……。」

「直撃した所初めて見たけど、流石は威力だけならゲーム内最高値ねえ！」

「圧倒的だね……でもこれなら。」

発動した本人は勿論残る二人も想像の三割増し位の景色に圧倒される、さしものフローラもこれでは生存は出来ていないと三人は考えていた、雲が晴れ降り落ちた電気の激滝が止み切つても龍と共に宙に浮いたままのフローラを見るまでは。

「うん、分かつてた。」

「何度も見て来た。」

「完全敗北だね、こつちは攻撃受けてないけど。」

並の相手なら何度でも倒せそうな大技を三回、間髪入れずに連続で受けきったフローラのタフネスさに呆れと尊敬の念すら浮かぶ、負けたのに晴れやかで無傷なのにどうしようもない疲労感を感じる。

「今までの比じやない位気持ちいい！ 麻痺も加わって猶更感じちゃう！ンン～最高！」

我が世は春、痛みと苦しみの花が咲き灼熱と極寒の風が吹く天よりは雹と落雷が絶え間なく降り続ける地獄絵図ここはフローラの修羅場、環境全てが彼女を満たす彼女を喜ばせる彼女を昂ぶらせる。「はあはあはあ、これだけダメージを受けてれば十分だよね？ もう時間もないしここで決めよう、憑依解除！」

フローラのHPは三分の一まで減り「激昂」も「正拳」も発動している、「リベンジソウル」もずっと待機状態を維持し続いている、迫る危機に対する準備は十分、後は行動するのみだった。

「憑依「辰の刻」ククルカン！ 追い込みの電撃鱗！」

更に追い込みを掛けHPを削り攻撃力の上限値を重ねる、すぐそこに迫る脅威はのつべきならない所にまで来ていた。

「ここに来て防御を固めた？ 次は何を考えてるんだ……？」

「さあ？ それより何か後ろが騒がしくない？」

「そう言われてみれば、ずっとここであの人の相手してて気が付かなかつたけど……なつ！」

それは迫つて来ていた、林を隔てた後ろで一人の異常に固い大盾使いが放つた攻撃の余波が止まる事なく広範囲に広がっていたのだ、それは猛毒の濁流だつた一人の大盾が多勢に対し放つた広範囲の猛毒攻撃その余りが時間を掛け三人に迫る。

「来た……アレが！ この悪寒の正体、させないよ……彼らは私に取つて、豪褒美をくれる人だから！ 「リベンジソウル」バースト！ 龍装電撃銀龍拳！」

三人に迫る毒の波にフローラは龍を象り電気を帯びるオーラを固

めた拳から解き放たれた、主の元を離れた銀龍の力の形代は迫る毒波を引き裂いて別け、更に消えずに突き進む通過す進路の先の毒液爆ぜ消して毒に濡れた鬼気すら焼き切つて、毒を吐き出す源へと直進する。

「ええ～！何アレ？こっち来る！ええ～い「悪食」！」

銀龍の形代が毒の源、大盾の少女と会的するのに時間は懸からず、自分に向けて真っ直ぐ猛進してくる銀龍に少女は大盾を翳しスキルで呑み込んでいくが、殺し切れない力が踏ん張る足を後ろに押し出す。

「うむむむ～！パワー凄すぎつ！でも負けなツキヤ！」

体中に力を込めて耐え抜こうと踏ん張る、だが最後の最後の最大の余波は耐え切れず大盾を放してしまって……。

「痛タタ……えつ痛い？」

イベント中無傷だつたその頬にダメージ痕が現れていた、それは大盾に呑み込まれ消える直前の銀龍の形造つたエネルギーが崩れる際に別れた破片の一つが大盾を放した少女の頬を掠めて出来たもの、大盾の少女がイベントで負つた現在で唯一のダメージであつた。

無論これはこの事実は様々な波紋を広げて、後に伝説へと昇華するNWO魔王と英雄の誕生として。

↓S I D E c h a n g e ↓

295名前：名無しの観戦者
化けもんすぎんだろ

296名前：名無しの観戦者
おかしい所

防御系スキルの発動無しの素のVIT値で魔法全てノーダメで受けける

アホみたいな威力の魔法

あいつのステドーなつてんの？

297名前：名無しの観戦者

魔法受けたのは鎧がなんかやばいスキル持ちなんじやないの？

298名前：名無しの観戦者

大規模スキルは殆どがエフェクト付きだから多分鎧が光ってないところを見るに何も無い

と思う

絶対じやないがな

299名前：名無しの観戦者
うん

俺も鎧は今のところ何も無い……と思う

300名前：名無しの観戦者
マジ何あの歩く要塞W

301名前：名無しの観戦者
マジで歩く要塞で草生える

302名前：名無しの観戦者
マジで歩く要塞で草生える

303名前：名無しの観戦者
おいなんか画面のはしが光つてないか？

304名前：名無しの観戦者
ほんとだちよつと光つてる誰かの攻撃？

あの毒の中で動けるやつがいたんだな

305名前：名無しの観戦者
はつ？

306名前：名無しの観戦者
はつ？

307名前：名無しの観戦者
はつ？

308名前：名無しの観戦者
……ごめん俺の目がおかしくなったのか銀の龍がいきなり画面の

はしからあらわれたんだけど？
309名前：名無しの観戦者
大丈夫俺にも見えてる

310名前：名無しの観戦者
俺も見えたぞ
つか絶賛格闘中だぞ♪

3 1 1 名前：名無しの観戦者
ナニアレ……？

3 1 2 名前：名無しの観戦者
歩く要塞がおされてる？

3 1 3 名前：名無しの観戦者
イベント中なにがおきてる?
予想の斜め上過ぎるんだけど……

3 1 4 名前：名無しの観戦者
あつ決着ついた

盾吹っ飛ばされて……ダメージが入った!!

3 1 5 名前：名無しの観戦者
マジでナニがおきてるこのイベント!!

ド？少女は自分が楽しむために

「何が……起きたの？」

「今さつき迄、毒の濁流が迫つてなかつたか……。」

「九死に一生を得たと言うか、敵に助けられたと言うのかな？」

目と鼻の先まで毒液の波が接近する恐怖体験をし身が竦む思いをした三人は、息する間もなく例の少女が放つた銀龍の一撃で難を逃れ茫然自失の中に居た。

「ふむ、気が削がれちゃつたみたいだねあの三人……これ以上は無理か、憑依解除！」

対していたフローラも三人の状況を察して、これ以上の戦闘継続は望めないと判断してフィールドを移動しようとククルカンとの憑依を解きその場から歩き出した。

「ううむ、やっぱりこの辺りはあの毒の影響が凄いね、どこもかしこも毒で染まってる……あゝあ、毒無効が無ければこの毒を全身で感じれたのにな／＼おしい！」

毒浸しの地面を悠々と歩くフローラは心の底から悔しがり、無念の情を浮かべ歩を進める。

「うん？誰か倒れてる、毒にやられた人達かな？お／＼い！」

そんな通常状態が異常者なフローラの行く先、毒液の地面に横たわるプレイヤー達の姿を見つけ駆け寄る。

「うつううううう……。」

「あつくうううう……。」

近付いたフローラの間の抜けた声とは対照的な瀕死且つ悲壮感に溢れた彼らは、フローラの接近を知つても動く気力すら湧かず返答を返す余裕もない。

「これはこれは、随分な重体な模様で……憑依 「巳の刻」 ナーガ！」

少しばかり離れた場所で控えていたナーガを目線だけで呼び寄せその場で憑依、再びナーガと融合したフローラは静かに手を胸の高さまで掲げ、その様子を身じろぐ事も事も出来ず眺めるだけの二人は最後を悟った様に目を閉じた。

「ザクッとしますね？」「ポイズンファイスト」！

「ゴフツ！」

フローラの謎の理の後に抜き手を突き立て体を刺し貫き、相手の体にエネルギーを流し込んでいく。

「ぐつ……ん？ 何だ……力が戻ってくる？ 回復してる？」

「お隣さんも「ポイズンファイスト」！」

「ガア！」

予想に反して起きた変化は一向に自分に最後の一瞬を訪れさせない、不審に思いながら目を開け自身の状態を確かめると不思議と力が湧いてくるではないか、体力が戻り始める事に驚い思わず上半身が起き上がった、その横で倒れていたプレイヤーにも抜き手を突き立てエネルギーを送っていくともう一人も驚きで起き上がる。

「一体何を……。」

「さつき迄、毒に侵されてた筈だよな……。」

上半身が起き上がった事でこの少女が自分達に何某かを行い、自分達は何故か毒状態から回復するに至っていた、ついさっきまでからは考えられない状況に自身の体を見つめながら困惑の意を溢す。

「ナーガ君との憑依時の時限定で使えるスキル「ポイズンファイスト」、通常時だと普通の毒攻撃なんだけど毒状態の相手に使うと毒効果を反転させ回復状態にするんだよ。」

「なつ！ そんなスキルが？ だが成る程な、だから毒状態から回復したのか。」

「ありがたい、しかし何故？ バトルロワイヤルでは、敵を助けても意味が無いんじや。」

疑問符が幾つも浮かぶ二人に対しフローラは特に気にした様子を見せずに解説し、それを聞いた二人は当初の疑問は解決し新たに浮かんだ疑問を口にした。

「え？ 何でって、それは私が全力で楽しむためだよ。」

「全力で？」

「楽しむため？」

その疑問にも当たり前の事に様に理由を語るフローラ、その回答の

内容を理解できず二人でオウム返しの様に続ける。

「そう、だつて体力が少ないなし状態異常に掛かった相手と戦つてもちつとも面白くないよ、寧ろ全然つまらないよ盛り上がりがない、だつたら相手に元気になつて貰う他ないじやない？」

「……。」

フローラは親切から彼らを回復させた訳じやない、彼女は自分が楽しむために一方的に彼らを直した……全快した彼らに甚振つて貰う為に敢えて回復させた、詰まる所フローラの我が儘なのである。

そんな彼女の一方的な独白を黙つて聞き続ける二人は、何か神々しいものを見る視線を向けていた。

「……」の人達じや無理か、まつ他にも人は居るし他何人か回復されれば一人か二人ぐらいは……じやあね。」

その視線の類が何たるかを察すると、少し残念そうな表情を浮かべ毒で侵された大地を見渡して気を持ち直し、他の相手を求めて歩き出す。

「あつー待つてくれー！」

「俺達も一緒に！」

「ミストイリュージョン」。

追う事は出来ればされたくないフローラは今回も「ミストイリュージョン」を使い、背をぼやかし姿を晦まして次なるプレイヤーを探す。「結局、皆ダメだつたかー。」

アレから何人か見つけだし「ポイズンファイスト」を使用、回復させ対戦を試みるが皆一様に鬪氣を向けてはくれなかつた。

「何処かに居ないかなー思いつきり戦えて飛んじやう位凄い一撃を撃てる人。」

フローラは求めていた体を揺さぶり心を穿つ強烈な技を放つ強者を、ここに至るまで道程で針で突かれるような痛みから小刀で斬られる様な痛みはごまんと感じたし堪能した、だがそれはやはり彼女にとつては前座で前菜、魔法の痛みは総合では確かに味わい深いのだがその分雑多な要素が絡み痛みそのものがぼやける為メインとは言い難く、そろそろ最大の旨味を持つた一撃を受け被虐心を充足させた

い。

「おつー・見晴らしのいい場所に出た、それじゃここからメインディッシュを探しますか？つて！早速いい人見つけ！」

気付けば小高い丘の上に出ていたフローラ、ならば丁度いいと丘の上から周囲を見通すと視界の中心より左の位置に大剣を振るうプレイヤーの姿を見つけた、彼の周囲には複数のプレイヤーが待ており期を窺いながら挑んでは討たれまた次の誰かがやつて来ては別の誰かが討たれる、一対多数の状況で圧倒的力量差で他を押しのける正にフローラが求める最大の一撃を持つ者、そうと決まれば留まる意味も無しにその大剣使いの元へ馳せる。

「強い……。」

「流石はゲーム内最強か。」

「次、お前が行けよ……。」

「おい、押すな……。」

一方の大剣のプレイヤーの元に集る有象無象のプレイヤー達は膠着していた、相手はゲーム内でも最強或いは最も先を行く者、一人で挑んでも無駄骨ないし大死同然であり同じ事を考える者は当然のように存在した、故に彼らはその場限りで結託し複数人で囮いジリジリと攻めようとしていたのだ。

「もう半数が突っ込んだぞ？まだばてないのかよ……。」

「少しも慌ててねえ、まだまだ余裕って感じだ。」

「ちつ！目算が甘かつたか……こうなりや、強引に切り崩すしか。」

「つーてもな、じやあ誰が最初に切り込むよ？俺は無理だぞ……。」

これだけの人数で囮めば多少な焦れて宿毛つくれると踏んでいた彼らは、大剣のプレイヤーの胆力が彼らの忍耐を上回っていた事で計算が狂い、作戦の変更を余儀なくされ誰を切り捨て役にするかで揉めはじめていた。

「ふう、そろそろ終わりそうだな……あと少し付き合おうか。」

そんな会話を耳にしていた大剣使いは、この膠着状態からの脱却が近い事を感じ始め静かに体験を構え直す。

「クソッ、もうお前が行け！」

「はあ！何でだよ、お前が行けよ！」

「ちよつ！ここで揉めんなよ！」

ここで無駄に立ち尽くす間もイベントの所要時間は過ぎていて、流石に動かない状況に痺れがキレたプレイヤー達も目の前の大剣使いではなく囮んでいる隣のプレイヤーに当たりそれが全体に伝播し始めた。

「もう無茶苦茶だ、誰でもいいから特攻してくれたら……。」

「じゃあ、私が行くね？」

同士討ちまで秒読みと言う絶妙なタイミングでその嘆願に応える声がかかり、横をすり抜けて一団を飛び出す白い人影が一直線に大剣使いに向かっていく。

「新しい乱入者？誰が来ようと……。」

その少女の出現は大剣使いも見てた、自制を失いつつある鳥合の衆の隙を縫い現れた少女は周りに脇目を振る事なく真っ直ぐ突き進んでくる、ここで少し面を喰らつた大剣使いではあつたが直ぐに冷静になつて体験を振り上げ待ち構える。

「はつ！」

「つ！よつ！せーい！」

大剣使いの正面に迫つた少女目掛け振り下ろされた大剣、それを少女は体を横へずらしひりぎり掠らせながら拳を突き出した。

「くつ！ダメージ自体は大した事は無いが当てる來たか……この子はデキる！」

胸を衝いた拳打に驚き数歩、後退する大剣使いはただ一回の会敵で少女の実力を推し量り、他と違うと確信したそれは周りも同じで。

「おいおい、誰だよあの子なんか可愛い子だけど今まで居たか？」

「否いなかつた、つかあんな白尽くしの装備着てたら目立つし気付く。」

「てか、今あのペインを退かせてなかつたか？」

「何もんだよあの子……？」

周囲の注目を集めている中フローラは一人、心中を悦びで満たしていた。

『ちよつと掠つただけでこの痛み……コレは滾る！もつと欲しい！』

ただ少し大剣の刃先が掠めただけでこれ迄とは比にならない鋭角な痛み、これこそフローラがメインに求めた極上の痛み、一回では満足できない何度も何度も味わいたい倒れない限り何度も、その渴望が彼女を前へ押し出すその痛みをもつとよこせと。

「攻め手が激しく！……少し本気を出すか。」

被虐の本能に湯がつたフローラの連撃を躊躇し、大剣を振るつて応戦するペインの太刀筋にも一層の鋭さが加わる。

『フフフ、さつきよりももつと鋭く深い……まだまだ上があつたんだ！じやあ、その隠してる分も堪能させて！』

痛みをその身で味わう為ならどんな無茶でも遣つて退ける、狂喜に満ちた被虐性を盛らせて最強のプレイヤーに挑みかかるフローラの様子を周囲のプレイヤーは呆然と見つめる事しか出来ない。

「なんだよ……アツ、全然ビビッてねえ。」

「俺達は、多勢で挑んでやつと立ち向かえたつてのに……。
「拳句、それでも劣勢になると直ぐに引っ込んで……。」

「情けねえ……カツコ悪いぜ俺ら。」

目の前で格上相手に一步も退かず足を突き出し体を前に倒す少女の姿は、さつきまでの自分達とは真逆であり勇ましいとすら感じたと同時に、それまでの不甲斐なさを悔いる一人ではダメで集団で行けば勝てるなど甘い幻想、一人で戦う度胸もない奴が最強に挑み勝てよう筈もないと勝手に思い込み始めた。

しかし、彼らが勇ましいと思ったフローラはただ自分が楽しみたいが為に今まで動いてきた、楽しみたいがためにソロプレイヤーからダメージを攫い、楽しみたいがために毒の波を割り苦しむ者たちを治療した、そして今も己が悦び楽しむために最強のプレイヤーと遊んでいる……言うなれば最狂の快楽主義者、痛みは悦び苦しみは楽しさだ一時の苦痛に流されるままに……そして、残り時間が一時間に迫るころ。

「現在の一位はペインさん二位はドレッドさん三位はメイプルさんです！これから一時間上位三名を倒した際、得点の三割が譲渡されます

！三人の位置はマップに表示されています！それでは最後まで頑張ってください！」

この緊張が張り詰めた状況を壊すように告げられたタイムリミットと追加ルール、それに触発された血に飢えた獣の様なプレイヤーがフローラと果し合う現在一位のプレイヤーペインの元へ呼び寄せられる。

「人が増えた？……関係ないな、今はただ目の前の戦いに集中する。」「ふふふ……賑やかで楽しいわね。」

互いの存在に釘付けでその間のアナウンスなど聞こえていなかつた、だから急に増えた周辺の人口密度の増加でようやく変化に気が付いた、そのまま二人の周りでも一悶着起きていた。

「あの二人の間には、割り込ませねえぞ！」

「くそっ！何だテメエ等！アイツを倒おしやアイツのポイントの三割が取れんだぞ邪魔すんな！」

「俺達は、アイツに怯えただから勝てなかつた！……それでも、怯えず恐れず戦い挑める彼女の戦いを邪魔させない事は出来る！」

「何言つてんだよ！おかしいぞお前等！」

周りを囲んでいた元々居たプレイヤーが後から来た、ペインのポイント狙いのプレイヤーの進路を塞ぐように迎撃していたのだ、そんな彼らの乱闘の騒がしさが伝わったのか周囲のプレイヤーも集まつてくる。

「なんか騒がしいね？あつここだ、つて何が……あの人は！」

「戦つてる、一位の人とあの人があの人が……。」

「やつぱり凄い……。」

「おい！居たぞペインだ！」

「もう誰かと戦つてる？急げ、ポイントを取られる！」

「クツソ出遅れた！あの白尽くめに気が集中してる、今なら隙を付ければやれるぞ！」

それは様々、例えればイベント開始直後の頃にフローラの介入で助かつた者たちから、ペインを狙う血氣盛んな兵まで実に雑多な人間が集まる。

「あの人達……行くよ皆！」

「あの人戦いを……！」

「邪魔なんてさせない！」

時は過ぎれば過ぎる程に周囲は騒がしくより混沌が濃くなる、ペインを討ちポイントをモノにしたい者たちと一人の戦いを水を注させたくない者たち、今この場が一番の熱量を持っていると思つても過言ではない。

「あはは！まるでお祭りね……いいえ、イベントだつたわね。」

「ああ、ずっと忘れていたよ……楽しいなこのイベントはもつと戦_{遊んで}つてみたい……だけど！」

多くの時間、刃と拳を交わし合つた二人の顔は晴れやかだ、途切れ事無く繰り出される殴打と斬撃の交差、フローラの両の瞳は一方は紅く一方は碧く光を宿し体は無数の切り傷を作つていた、対するペインにも多くの打撃痕を残し肩で息をする。

「楽しい時間はあつという間か、アレから何人か他の人も挑んで来て面白かつたよね？」

「ああ、虚を使って来るからハラハラしてドキドキした！」

他愛のない会話を挟む中でも互いに交戦の意思は緩めず、寧ろ鬪気はこれまでに無く高まつてきている。

「そろそろ終わり……なら「リベンジソウル」バースト！」

「最大の一撃で締めくくる！「会心の聖剣」！」

互いが高め合つた熱い血潮を吐き出すように最後の一撃を放つ構えを取り一呼吸が入る、そしてゆっくりと歩み寄りフローラは拳をペインは剣を相手目掛けて繰り出した。

「終了！結果、一位から三位までの順位変動はありませんでした。それではこれから表彰式に移ります！」

それは後僅かで互いの一撃が決まると言う絶妙なタイミング、イベントの時間の終わりを告げフローラ達は通常フィールドに引き戻される。

「…………ああ、終わっちゃった。」

ペインと交差するように放とうとした拳を何度も広げて握るそし

て広げて暫く無言を続けた後、残念のそうに呟くさつき迄の血の昂ぶりが嘘の様に冷静になり、表彰台に立つ三人を見ずに背を向けて会場を離れた。

「惜しかつたな」最後の一撃、決まってたらきつと気持ちよかつたのにな。

誰が聞く訳でもない為吐き出す独白、今回のイベントをフローラは概ね満足していた。

常に味わえる精神的緊張感の苦しみと肉体的な痛み、彼女の被虐心をこれでもかと盛り立ててくれたがただ一つ唯一の心残りがあつた、それは最後にペインが放つた一撃を味わえずに終わつた事、あの一撃さえ体感できれば残念に感じる事の無く終われたのにと感じる。

「まつ！焦らしだと思えば、これはこれで……それに、ゲームを続けていれば次の機会もあるでしょ？」

今回はお預けだとと思う事で別途被虐心を満たし、次なる苦痛に期待を寄せ身を躍らせるフローラの直ぐ横で黒い鎧の少女が通り過ぎた、だが自分の世界に浸るフローラは気付かず少女も溢れる羞恥心から周りが見えておらず互いに気付かない。

そして、一人の少女が居ない表彰台の上では最後の一位ペインのコメントが大きな話題を呼んだ。

「今回のイベントは大変愉快でした。ですが、最後あの白いガントレット使いとの決着が着かなかつた事は心残りです。願えるなら彼女とは再戦がしたい。」

最強に食らいつき最後まで生き残つた白い少女、フローラはもう一人の少女と共にイベント後の話題の中心なつたのは言うまでもない。

少女と少女あるいは魔王と英雄

【NWO】メイプルちゃん＆フローラちゃんの謎【考察】

1名前：名無しの槍使い
スレ立てたぞつと

2名前：名無しの大剣使い
おう

議題は我らがメイプルちゃんとフローラちゃんのことだ
3名前：名無しの魔法使い

正直ペインよりもやばいと思つた

メイプルちゃんが三位なのもそうだけどフローラちゃんは11位
なの何で？

4名前：名無しの槍使い

マイプルちゃん→序盤廃墟でお絵描きしてたから

フローラちゃん→自分で倒せる場面で他プレイヤーにポイント献上してたと思われる

5名前：名無しの弓使い

メイプルちゃん可愛すぎかよ w

フローラちゃんは世話好きなのか？

6名前：名無しの大盾使い

あれ本当に大盾なのが不安になるわ

あつ因みに俺は九位でした

7名前：名無しの槍使い

流石

大盾でそこまでいくとは

(メイプルから目を逸らしつつ)

8名前：名無しの大剣使い

それでは今回の二人のまとめだ

第一回イベント

メイプル三位

死亡回数0

被ダメージ5

撃破数2025

フローラ11位

死亡回数0

被ダメージ4067

撃破数2010

二人の装備

メイプルー敵を飲み込む謎の大盾とアホみたいな状態異常魔法を発生させる短刀と黒い鎧

黒い鎧は異常性能を発揮していないように思われる
異常なまでの防御力で魔法使い五十人からの集中砲火ノーダメで受けきる

フローラー全身を白尽くめの装備で固めていたがこれといった性能はないと思受けるられる

ただ装飾品にモンスターを召還及び憑依できる八卦盤のようなアイテムを所持しておりイベント中に一度だけ使用

また攻撃を避けずに敢えて受けていたと思われる行動も多数回確認される

9名前：名無しの魔法使い

もう本当に何回見ても頭おかしいとしか……

10名前：名無しの大盾使い

大盾→まあそういう装備もあるかな……うん

短刀→まあまああるかもしけんな

メイプルちゃん本体→は？

本体のステとスキル構成が一番の謎

メイプルちゃんのVITいくつよ……

11名前：名無しの大剣使い

メイプルちゃんはマジで歩く要塞だったからな

その要塞に手傷を受けたフローラちゃんも大概だけど……マジで

12名前：名無しの魔法使い

フローラちゃんはなあ……

というかあれだけダメージ食らつて死亡回数0つてどうなつてんの？

13名前：名無しの弓使い

それなw

14名前：名無しの大剣使い
もしかしたらだけどフローラちゃんも極振りつて線はないか

15名前：名無しの大盾使い

極振り？

それつてフローラちゃんもメイプルちゃんと同じ様にステ振りを一極集中させてるつて事か？

16名前：名無しの槍使い

ありえるなフローラの武器はナックルだしそれこそ基礎ステ全項目最低限振られてるし

HP極振りなら回復スキル込みでならあの被ダメージでノーデスマ有り得る

あとは基礎ステだけでどうやつてメイプルちゃんに傷を付けたか
だけどHP減少が条件の強化スキルならあるいは

17名前：名無しの弓使い

「激昂」か「正拳」あたりは持つてそう

18名前：名無しの大盾使い

そういうや最初の森の奥で見た時に荒ぶつていたのつてスキルのせ
いだつたのか？

19名前：名無しの大剣使い

じやあ「激昂」だなあれば混乱（強）の状態異常をおこすから

20名前：名無しの魔法使い

HPの最大値から70%強化だけ？

でもその強化値でメイプルちゃんにダメージが入る程になるかな
?

21名前：名無しの槍使い

ジャストガードと「バイアッチャレンジ」で実ダメージは抑えつつ蓄積ダメージを増やした可能性あり

あとは被ダメージをステータスに可算するスキルなんかもあると
は聞いた

でもあの召喚と憑依が出来るアイテムとフローラちゃん自身のHP
総量には謎が残るけど

22名前：名無しの大剣使い
「リベンジソウル」のことか？

あれ一度発動させると待機状態になつて攻撃を受け続けてから再度発動した直後の攻撃に溜つた総ダメージ量を可算するつてやつだろ

23名前：名無し弓使い

発動までに時間が係るタイプのスキルか…：

その効果なら直前の行動とその後のエフェクトを見るとアタリっぽいな

メイプルちゃんはVIT極振り以外持つてるスキルは分かつてないのにフローラちゃんは本体と装備以外は結構割れてきてるなW

24名前：名無しの大盾使い

状態異常→分からん

防御力アップ→そんな硬くなるスキルがあれば取つてる

大盾→知らん

HPアップ→これも知つてたら取つてる

謎の召喚アイテム→どこにあつた？

25名前：名無しの魔法使い

これ

メイプルちゃんの持ちスキルが一個も分からん流石に基本的な奴は持つているだろうけど

メイプルちゃん固有のやつが本当分からん

フローラちゃんの方は基本スキル以外は取つてないぽいし固有はほぼアイテム頼りつて感じか？

26名前：名無しの弓使い

メイプルちゃんタイマン最強じやない？

フローラちゃんは集団戦の方が強しだけど

27 名前：名無しの魔法使い

マジであり得るな

メイプルちゃんのあの広範囲の状態異常攻撃を何とかしないとまあまず勝てん

致死毒とか言つてたし相当高位の魔法

それを裏返して回復効果に変えたり龍のオーラを放つフローラちゃんも大概だけどさ

それで疑問なんだがMPどうなっててるん？

あんなポンポン魔法使つて、しかも二人ともMP以外で極振りだろ多分？

MP足りないだろ普通

28 名前：名無しの大剣使い

あれなー……メイプルちゃんなら多分大盾が魔力タンクになってる

喰つたものを魔力にして溜め込む感じ

フローラちゃんは分からん

29 名前：名無しの槍使い

じゃあメイプルちゃんの場合はあの紅い結晶がそうか

確かに魔法使う度に割れてたしな

30 名前：名無しの大剣使い

つまりメイプルちゃんは

自分自身はあり得ない程の高防御でフローラちゃん以外はあらゆるダメージをゼロにし

フローラちゃん以外が装甲を抜こうと攻撃やプレイヤーをMPに変換し

状態異常で叩きのめす

かたやフローラちゃんは

自分自身の有り余るHPを糧にすべての攻撃をその身で受け止め時には半減させて残りを溜め止め

反撃の際は受けたり溜め込んだダメージを攻撃力に変えてメイプルちゃんですら押し出す威力の攻撃を叩き込む

とこういう訳だな

3 1 名前：名無しの槍使い

何そのラスボス

何その少年漫画の主人公

3 2 名前：名無しの弓使い

ええ……メイプルちゃん鬼畜過ぎんよ

それとフローラちゃんは頬もし過ぎんよ

3 3 名前：名無しの大盾使い

しかも二人ともまだ隠し持つてるスキルがあるかもしれないとい

う

フローラちゃんがダメージ入れた時メイプルちゃんは瞑想でHP回復してたし

3 4 名前：名無しの魔法使い

ラスボスのHP回復は禁止つて昔から言つてるだろオ!!

そしてフローラちゃんならどうにかしてくれそうオ!!

3 5 名前：名無しの大剣使い

自分でも文字に起こすと変な笑いが出たわ

しかも二人とも始めたところ

まさに魔王と英雄

大型新人過ぎる

3 6 名前：名無しの魔法使い

次のイベントでは二人とも鎧も異常仕様！

はいこれ

3 7 名前：名無しの弓使い

実際既にトッププレイヤーなんだよなあ……

あれヤベエわ

可愛くて強いとか最高かよ

3 8 名前：名無しの槍使い

見守つてやろうぜ

ステが第一線級でも中身は初心者だ

3 9 名前：名無しの大剣使い

そうだな

これからも各自調査を頼むぞ

40名前：名無しの弓使い

ラジヤー

41名前：名前：名無しの魔法使い

ラジヤー

42名前：名無しの槍使い

ラジヤー

43名前：名無しの大盾使い

ラジヤー

S I D E C H A N G E

『私、馳車雪花には後悔がある……。』

一階層始まりの街、その中心部の広場に一人の少女が長く迷い躊躇つていた事に踏ん切りをつけ、少し疎遠となっていた友人に連絡を取りこの場所で待ち合わせていた。

『風花との中学最後との試合、私はあの子と交わした約束に背いた……背いてしまっていた。』

風花は同年代最強の女子武道家だつた、苦しみも痛みも歓びに変える彼女は一度試合を行えば、対戦相手に追い詰められれば追い詰められるほどに嬉しくて笑つてしまふ、最初の内は素面を保つていても時間が経てば経つ程に笑みを押さえられない、相手からしてみれば果敢に攻めてもどれだけ追い詰めたと思っていても彼女は逃げもせず受け止めては苦渋の表情を浮かべず笑顔を見せる、その笑顔は嘲笑等とは比べ物にならない狂氣を孕んで見えただろう、結果相手の心が折れる……戦意が失せ風花への得体のしれない恐怖が勝りその後は試合にはならなかつた。

『あの子はそれを理解して自分で抑えようと必死だつた、けど……。』

当然圧倒的な力量差あつての勝負もあつた、だが彼女の不気味な笑みが敗因と風花を責める者もいたし彼女もそれは実感していた、だから直すように努力もした工夫もしただが。

どんなに精神統一を行い表情を変えない鍛錬を行おうとも、彼女が試合中に喜悦の表情を見せる癖は変えられなかつた。

もしろ抑えようとする程、その精神的苦痛も相乗され無意識に笑つてしまい、またそれを非難されるその繰り返しだつた。

そんな日々が過ぎる内、風花の周りには雪花以外の同好の友は居なくなつた、強すぎたが故の孤立であり性癖も含めた才能の恵まれ過ぎたが故の弊害。

風香は孤独が嫌いだつた痛みや苦しみは相手が居てこそ、個人で味わえる苦痛も悪くないのだが味気ないものだつた、だから苦しめてくれる人を欲した痛めつけてくれる人を望んだ、ただ無邪気に幼子の様に通じ合える友人を求めそして失つた。

ただ一人幼馴染の雪花を除いて、同じ世界に身を置いていた彼女はただ一筋に努力を続けた風花を見ていた、誰も認めようとしなかつた彼女が自信の性癖の性で悲しみを抱えている姿を見て來た、だから……。

『だから約束した、風香との試合の時に私は貴女の笑顔には怯えないと。』

雪花は風花に誓つたそして風花も雪花に誓つた、もし雪花が自分の笑顔に怯えてしまつたら二度と試合には出ないと。

二人の激突は、彼女たちにとつて中学生活最後の試合で叶つた、そして……。

『私は……一瞬でも怯んでしまつた、それに気付いたのは風花の表情だつたけ……？』

二人の試合は技と力の激しい応酬の連続、やがて精魂の果てが見え始めた時、風花が笑みを浮かべ始めた直後彼女の顔は絶望の色を浮かべたのに気付いて悟つた、自分は怯えたのだ彼女を非難した者たちと同じ様に彼女の笑顔に、試合は風花の勝利に終わりそれを最後に彼女はその世界から去つた。

『大切な親友を裏切つた、もう一度と顔は見せられないと覚悟していだ……だけど、風香と縁が切れるのは嫌だつた。』

如何にかまた仲良く出来ないかそう考えを巡らせた時、このゲーム

の体験版モニターの募集の広告を見つけ応募した。

『現実の試合は無理でも仮想現実でならと一縷の望みに懸けた、まさかモニターの審査が通るとは思わなかつたけど。』

βテストとして参加したNWO、その世界はまた風香と共に遊ぶには理想的な場所だと確信し、正式リリースを待つて彼女を誘つた、後は風花が誘いに乗つてきて来るのを祈りながら待つた。

『私は風花を一度でも裏切った人間、あの子が会いたくないと思われていたらと考えたら怖くて連絡が遅れなかつたけど、でも来てくれた。』

この前のイベントで画面上で大立ち回りを演じる彼女を見付けた、彼女はこの世界ではフローラと名乗つていた、フローラはまだ自分を友人と思つてくれているそう確信した雪花は、この世界でティアードしてもう一度フローラと友になろうと行動した。

『それが今日、フローラは着て来るか分からぬいけど……私は信じるだけ、彼女の心を……！』

もう一度、今度は向き合う対戦相手ではなく並び合う同氏として、フローラと共にこの世界を満喫したい。

『だからどうか……！』

「貴女がティアード久しぶりだね！」

一度と違える事をしないよう今度こそ裏切らない様に、直ぐ傍に控えていようと強く心に誓うだつた。